
斬殺者(ザッパー)

藤巻 彩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザッパ
斬殺者

【Nコード】

N0374X

【作者名】

藤巻 彩斗

【あらすじ】

人は、とても弱く、脆い存在だ。

知能は高く、運動能力に長けていないとは言わない。弱いのは、その精神、そして寿命だ。

ただ一つの言葉で崩れてしまうような弱く脆い精神。…そして、世界の寿命に比べれば塵にも等しいほどに短い年月しか生きられぬ、たかが80年と少しの寿命。

人は、世界の『理^ル』には無力だ

だが、世界にはその『理』を超越する、ただ一つの種族が存在する。

その名は『吸血鬼』。

人の生と死を超越した、ただ一つの存在。

それは、実在していた。

0 章・出会いと始まり

ザアアア……

ひたすら地面に降り注ぐ雨が、耳元で鳴り止まない音を発し続ける。

コンクリートに当たった雨粒は弾けて消えてしまうものの、その雫は堆積し水溜まりを成してゆく。

パツ、と辺りが急に明るくなり、その直後に雨音をも打ち消すような爆音が響く。遠くで雷まで鳴っているらしい。

そんな激しい雨風に打たれ、俺の体は冷え切ってしまったていた。

休む暇もなく降り注ぐ雨が俺の服に吸い込まれ、地面に広がるモノと溶け合って、濁った染みを残す。

……だが、服に付いた染みは土の茶色をしているわけではなかった。

燃えるような深紅、血の赤色に染まっていた

俺の腹部から溢れんばかりに流れ出るソレは、雨水によって熔けだし、量を増してさらに大きな水溜まりを作る。

その血液に含まれたほのかな熱まで流れ出ているようで、血を失えば失うほど俺の体温も目に見えて低くなっているように感じられた。

寒い

傷の深さは恐らく、内蔵まで届いているのだろうか。もしかしたら、食道の一部がはみ出てるかもしれない。

傷が大きすぎる上に、雨に血がどんどん流されて行くためか、出血が収まる気配がない。

血を失いすぎた。そのせいか、既に痛みではなく、体の異常な寒さしか感じなくなっていた。助けを呼ばないと……だが、それも無駄だろう。

意識が朦朧として、既に体を動かすこともままならない。

それに、ここは表の道からは見えにくい路地裏の奥だ。仮に声を出せたとしても、そもそも一般人はこんな所を通ったりしない。だから、こんな所で人が死にかけていても気付かない人間が大半だろう。

……どのみち、俺は助からないだろう。……いや……。

俺なんて、助かったって仕方がないだろう

周りから見捨てられ、唯一信頼できるはずの家族にも見捨てられ、もう頼るものなど存在しない俺など……。

周囲からの縁を断ち、一人で生きることを決めた俺など……。

世界が、俺を生かす気が無いなら……もう……いつそ……。

「君は……こんなところで終わっても……いいのか？」

不意に俺の頭上で響いた声。

雨が鳴り響き、人の雑踏の音すら掻き消される中で一際よく響き、尚且つ圧倒的な存在感を持つ、凜として清楚な、女性の声だ。

突然、俺の体に降り注いでいた雨が止んだ。

いや、違う。俺の頭上に傘がさされたのだ。

傘に当たった雨がさらに大きな音をたてる。端から滴り落ちた大粒の雨もまた、地面に当たり大きな音をたてる。

だが、そんな音など耳に入らないほどに、傘を差した彼女の
声は、大きな存在感を放っていた。

「もう一度聞こう。……君は、こんなところで終わるつもりか
？」

…周りの音は、もう何も聞こえない。

ただ、彼女の壮麗な声が聞こえるだけ。

ただ、夕闇よりもさらに濃い黒の、彼女の姿が見えるだけ。

ただ、彼女の強い意思が言葉に乗って伝わってくるだけ

「少年よ。君はまだ生きたいか？」

美しくも猛々しく、凛々しくも優雅なる言葉。

ついさっきまで生きること絶望していた俺の心は、いつしか彼
女の言葉に惹かれていた。

死に捕われていた俺の体が、まだ死ねない、と鼓動を高めている
のが分かった。

彼女が誰なのかは知らない。既に視界もぼやけてしまってい
て、その顔も見えない。だが、その言葉の強さに惹かれてい
た、その声の強さに見とれていた。

俺は…、こんなところで

「……死に……たく……な……い……」

再び、体中に血が巡る。四肢が熱を帯びていく。

体中の血を失い、既に気を失ってもおかしくは無いほどに弱って
いた俺の体は、まだ生きることが諦めずに、死に抗おうとしていた。

……そうだ。まだ、俺は

「……生き……たいッ……!!」

君の顔も知らない。君のコトも何も知らない。だから……

死ねないんだ。まだ

「そうか。ならば与えよう、君に」少女は傘を捨て、ずぶ濡れになりながらしゃがみ込む。

穴の空いた俺の腹に手を置き、そつと手をかざし、顔と顔を近づける。

彼女の白い指が、俺の肌に触れてくる。

温かいはずのその指は冷たく、今の熱を帯びた俺の体とは対照的だった。

そして、彼女は言い放った。

「……生きるための力を与えよう。……そう……」

「『ヴァンパイア』の、力をな……」

彼女の最後の言葉を聞いた以降の記憶は、今の俺には残っていない。

次に目を覚ました時、俺は自宅のベッドの上で寝転んでいた。あの夜の記憶も、一週間たった今でははっきりとは思い出せず、靄がかかったようになっていた。

だが、一つだけ確かな事実があった。

……俺の腹に残った巨大な傷痕。…そして、俺の元に届いた一通の黒い封筒に入った手紙。

この二つが示す、小さな、けどとても大きな事実。……それは…

…

俺の日常は、今まで通りに平穏ではいてくれないってことだ。

1章・陰りと手紙

ザアアア……

「また、雨か……。そーいや、前も傘忘れたんだっけか……」
ハアッ、とため息をつき、人の出が激しい予備校の入口に立ち、再び曇りに曇った曇天を見上げる。

今朝のニュースの天気予報では降水確率0%。それでも気になつて見た携帯の天気予報サイトでも今日は快晴。加えて、今朝の空模様は雲一つ無し。今日は終始晴れ続けるものだと思っていたが……。

どうやら、周りの人間もこの雨は予想していなかったのだろう。携帯で電話して迎えを頼むやつもいれば、鞆を雨避けにして走って帰るやつもいる。止むまで待つ……。なんて考えるやつもいるな。

かという俺も、冷静に周りを観察をしてはいるのだが、正直どうやって帰るべきなのか悩んでいる所だ。

もちろん、傘・合羽は無し。鞆を雨避けにしようにも、布製なため使ってしまうと中の教科書やノートが使い物にならなくなる。

電話をしようにも、実家は首都圏には無いため、迎えが来ることはまずないだろう。

コンビニで傘を買うという手は……無いことはないが、既に目の前のコンビニに数十人の予備校生が入り、安物のビニール傘を購入していったのを確認している。もう傘は売切れ、その手段は使えないだろう。

止むまで待つという手も、まるで意味が無いだろうな。さっきから雨は激しくなる一方で待っても意味はなさそうだし、何より、予備校ももうすぐ閉まる時間だ。そんなにこの場所に長時間いられる訳でも無いだろう。

「ハア……」

「どしたの、神谷くん、こんな所で突っ立って？」

二度目のため息に合わせるようにして、俺の背後で少女の声があ

がる。

振り返るまでも無く、その声の主はすぐに特定できた。いつも予備校の授業の際、俺の隣でうるさい女子だ。

「さえみや 冴宮：。まだお前も残ってたのか」

明るく可憐な、まるで天使のような 他の塾生が言っていただけなので、俺はそうは思わないが 可愛い笑みを浮かべ、俺の後ろに立つ少女。

冴宮 御鈴。みすず

現・私立能美学院高等学校の三年生にして、今年の都立帝都大学の受験生である。

おおよそその童顔や小動物のような背丈からは判断しにくいのだが、歴とした18歳で、俺の年齢とは一歳しか離れていない。

日本人には珍しく、深い青色の髪と瞳を持っている。ちなみに髪型はポニーテールで、好きなやつは好きらしい（俺は興味ないけど）。

「奇遇だねえー！今日は受けた講座が違ったから会えないと思ったんだけど、まさかこんなところで会えるなんて！……雨さんはわたしたちの友情に涙して降ってるのかな？」

「それは無いだろ」

「うつ……！神谷くん手厳し過ぎるよお……じょーだんなのに……」

俺の容赦ないツツコミに対して、胸を抑えてからへなへなと膝を折って跪く奇妙なりアクションをとる冴宮。これが都会の高校生のあるべき姿なのか……と少々疑問にも思えるほどに珍妙だ。

……あと、どうでもいいんだが、スカートがめくれかけて、色々教育的によろしく無い気がする。

「……？わたしの顔に何か付いてる？」

「いや、何も」

いつの間にかまじまじと見つめていたらしい。視線の方向を悟られる前に別の方向を見直す。

……幸い、こういったことに鈍感な冴宮はまるで気づいてないよう

だった。セーフ。

俺が目を逸らした方向には、巨大な電子パネルが設置され、そこでは夜の情報番組が流れていた。

さっきまで雨天時の帰り方や、冴宮のつまらないギャグなど、日常的なことしか考えていなかった俺だが、そこに流れるニュースの一つを目にした途端、ぬるま湯から引きずり出され、冷水を被ったように気が引き締まった。

『……昨夜未明、六本木ヒルズ付近の路地裏で、20代前後の男性が腹部を刃物で刺され、意識不明の重態の状態で倒れているのが発見されました。しかし、目撃者が通報し、救急車が現場に着いた時には、その男性の姿は無く、周囲には何も残っていなかったそうです。警視庁は、被害者の捜索に当たるとともに、この事件が

……』

「……」

「また殺人事件かぁ……。最近多いよね、こーゆう物騒なの……」

「……ああ、そうだな」

「……？急にどしたの、なんか暗いよ、神谷くん……？」

「……何でもない。気にするな」

「何でもない」と言うのは、当然のように嘘だ。

俺には、この事件について何か思い当たる節……というより、違和感を感じるのだ。

実を言うと、俺には昨夜の記憶　この事件が起きた時間帯ちよ
うどの記憶が、すっぽり抜け落ちているのだ。

9時頃までの記憶は残っている。今日と同じように、予備校に通い詰めで……。

だが、その次に記憶に残っているのは、暖かい快晴の空から降り注ぐ太陽の光を浴びて、自分の部屋で目を覚ましたこと。

……つまりは、予備校から、家に帰るまでの記憶だけが抜け落ちてしまっているのだ。

普通の記憶喪失なら、今までの記憶を全部失うか、軽いものでも一週間近くの記憶は失うはずだった。

それともう一つ引つ掛かるのは、俺の腹に残った大きな傷痕のことだ。

痛みは無いし、もう完治しているのだろうが、俺はこんな大怪我をした記憶が無い。

記憶に無い怪我 単純に考えれば、記憶が無いうちにしてしまったというのが妥当だろう。

この怪我のせいで記憶を失ったというなら、辻褄が合う。

だが、何故俺はこんなに大きな傷を負うことになった？

確かに、昨日も雨が降ったが傘を忘れたために、走って帰ろうとはしたが、それで滑って転んだからといってこんなに大きな傷痕は残らないだろう。

と考えると、昨夜俺が記憶を失った時間帯、その時起きた事件と俺の記憶喪失とは、何らかの関係があると見て間違いないだろう。

確信は、持てないがな。

「そういえば、お前はどうやって帰るつもりなんだ？」

「んにゅ？今日は親が迎えに来てくれるよ。神谷くんは？」

「……止むまで待つつもりだよ。傘忘れたし、迎えも来ないからな」「そーなの？……それならわたしの傘、貸してあげるよ」

俺の答えを待つことなく、冴宮は花柄の鞆の中身を漁り始める。

今時絶対流行りそうにない柄のハンドバッグだな、と内心失礼なことを考えながらも、傘を貸してくれるというのは有り難い、とも思ってはいる。

……傘の柄については、嫌な予感しかしないが。

「あつた！はい、これ！貸すだけだからね！」

「あ、ああ……」

間違っても借りパクだけはしねえよ、と心の中で呟きながらも、ちゃんと傘を受け取る。

傘を開くと、……案の定、少女趣味全開の花柄プリントが広がっていた。

……はずかしすぎるだろ、これ……。

「迎えも来たし、先に帰るね。また明日！」

「ああ。またな」

黒の高級そうなセダンの後部座席の窓から手を出してブンブンと振ってくる冴島。

運転手は黒スーツにグラサンを掛けており、まるで映画に出てくるSPのようだ。　　というか、本当にSPであつたりする。

何を隠そう冴宮　美鈴は、父に現総理大臣・冴宮　金彦^{かねひこ}を持ち、母にかの有名な財閥グループ、一留木^{いちのみぎ}財閥会長、冴宮　御来^{みらい}を持つ、真正正銘のお嬢様、SPに守られてもしようがないほどにやんことなき身分の人間なのだ。

当然、命を狙ったり誘拐しようとしたりとかする輩も少なくはないので、普段から護衛としてSPがついているらしい。

今日も……ほら。ビルの影から5、6人。黒服の厳ついお兄さんが出てきたよ。

いつもなら多くても2、3人ぐらいのはずなのだが、やはりあの殺人未遂事件を警戒してのことなのだろう。当然といえば当然

だろうな。

影から出てきた黒服軍団は、全員セダンに乗り込み、冴宮が乗った車をさっさと追いかけて行ってしまった。

「……」

…座席余ってるなら乗せろよ、と言う暇も無かった…。

俺こと神谷 遼^{りょう}は、かなりダサい花柄の傘を差し、夜遅くになってもう誰も通っていない六本木の街道を進んでいた。

俺が借りているマンションはこの道沿いにある。通り慣れた道だ。六本木ヒルズから出てきたと考えられる人影と時折すれ違うこともあり、その度に感じる視線が痛いとは思ったが、それ以外は何も違和感を感じなかった。

ただ一つ、俺を見つめ続ける目以外には

「……薄気味悪いな……さつきから……」

どこからかは分からない。背後か…それとも横か…前なのかもしれない。

ただ感じるのは、視線だけ。

ただ見られるだけなら、こんな冷や汗なんて掻きはしないだろうし、恥ずかしい程度で済むだろう。

……だがこれは、何かを探られているような視線。何か監視されているような視線。

「……くそっ……」

苛立ちは徐々に募っていくだけだった。

結局予備校を発ってから俺のマンションに着くまでの30分間、気味の悪い視線が止む気配はまるで無かった。

時々後ろを振り返ってみたり、「出てこいッ！」と叫んでみたりしたが、視線はずっと俺を見続けているだけ。反応なんて一切無かった。

…のだが、マンションの玄関までたどり着くと、途端に薄気味悪い視線は消え失せ、激しい悪寒もなくなってしまった。

余りにあつきり消えてしまったので少し拍子抜けしたが、それでも気分はすつきりしたので良かったと思う。

「…今日は無駄に疲れる日だな」 激しい雨でびしょ濡れになった傘を軽く振って水滴を落とし、折り畳んでしまう。

雨でこのダサイ花柄も一緒に落ちてくれたら……なんてのは当然のように無いので、せめて通りかかったご近所さんに俺が悪趣味ではないかと疑われないように、隠すぐらいはしとかないとな。

さらに気疲れしたような感じがするのは、たぶん気のせいだろうな。

自室の番号『506』の郵便受けを開け、自分宛ての手紙が届いていないか確かめてみる。

すると案の定、ズルズルズルズル…と大量の派手な柄の封筒が流れ落ちてきた。

「またかよ……もう十分だったの、予備校の案内書なんて…」

俺は、実を言うなら浪人生であり、これから一年は志望校合格を目指して猛勉強しなきゃいけない立場である。

だから、すでに高校を卒業している以上、自分で勉強するか、予備校に通うか、家庭教師を雇うかぐらいしか、受験勉強をする方法なんて存在しない。

だから必然的に、こういった予備校やらかてきょーやらの案内状なんかが大量に送り付けられてくるのだ。

…まったく、いい迷惑だったの。

「……ん？」

だが、いつもは勉強関連の（ある意味）迷惑メールだらけのポストの奥に、ただ一つだけ、異質なオーラを放つ封筒が存在した。

普通は切手、住所、郵便番号なんかが貼り付けてあったり書いてあったりしているはずなのに、その封筒には何も書かれておらず、切手も貼られていなかった。

封筒の色も変だ。普通なら茶色をしたものや白色をしたものが主流だと言うのに、それは完全なる黒色をしていた。

そして、その中心にはただ白い文字で…『神谷 遼様へ』…と書かれているだけだった。

「何だ……これ……？」

どう考えても塾案内の封筒には見えない。

それどころか、まともな郵便の運通を通して届けられたものであるかどうかも定かでは無かった。

おかしすぎる……。

今、俺の身の回りでは、奇妙なことが起き続けている様な気がする。

昨夜の記憶欠如、帰宅途中感じた視線、…そして、この黒い手紙……。

何故か、この三つの出来事は、切っても切れない関係にあるような気がしてならなかった。

……そして気がついたら……その封筒を、まるで破り捨てる勢いで開けようとしていた。

『どうも、初めまして。……とはいっても、手紙では君は私の顔が分からないだろう。それに、私たちはお互いに、すでに顔を会わせているのだ。初めましてとは、誤った言い方ではあるな。』

突然このような手紙が送られてきて、君はさぞかし驚いているだろう。だが、安心してほしい。私は君の味方だ。……少なくとも、君が私たちの目的の妨げと成らないのなら……の話ではあるがな。

……そろそろ、本題に入るとしよう。

神谷 遼君。私は……君と直接会って話したい。

もちろん、無理にとは言わない。君の意志で私に会おうと思ったなら、下に明記した住所まで、今週の満月の日の午前0時ちょうどに来てほしい。

……それに、無料^{タダ}とは言わない。君が知りたい情報、私が知っている限りのことなら、できる限り提供しよう。

……君に、世界の闇に飛び込む勇気があるなら、君とは再び会うことになるだろうな。

……それでは、また会おう。』

……手紙の最後には、『東京都渋谷区神宮前***』と、この手紙の主が待つと思われる場所の住所が記されていた。

「嫌がらせ……じゃないよな……。……何なんだよ……。これ……。……」
手には汗が浮かび上がり、便箋が僅かに濡れてきた。

この手紙が何なのかは、まるで検討もつかない。……だが俺は、

この瞬間に、何かを感じ取っていた。

俺に襲い掛かるであろう、何かを……

2章・会合と吸血鬼

件の手紙に書かれた住所にある建物は、そう簡単に見つかってはくれなかった。

……まず、渋谷区の喧騒の中で建物をじっくりと見る見る事ができなかった。

無駄に多い夕方の人波に吞まれ、あっちゃこっちやに流されるうちに数十分の時が流れ、結局そこではなかった……というのをループのように繰り返していた。

そしてようやく気付いた。黒い手紙を送る様なやつが、表に居を構えているはずが無いということに。我ながら気付くのが遅すぎる。

そこからは探し方を変え、裏路地の住居を虱潰しに探し回ることにした。

……だが、ここでも面倒なことに、簡単に搜索が出来るわけではなかった。

…それは、カラーギャングの存在だ。

決して多い訳でもなく、法律が一層厳しくなる度数を減らしているの存在ではあるが、その存在が完全に消滅したわけではない。

最近もいくつか顕著な名前のグループは存在するらしく、それらの台頭に伴って、いくつもの小規模なグループが結成されているらしい。

……そして、『ギャング』と名の付く以上、そいつらも血気盛んで野蛮な輩が多いのも、また事実だ。

「アアン!? テメエどこ見てほつつき歩いてんだア?」

「いってー! 骨折れちまったアー!」

「テメエ慰謝料払えやオラア!」

… 搜索に入る前からこれだ。

狭い路地なので仕方ないとは言え、道いっぱいに3人ぞろぞろ広がって進む若者を避けるというのが無理な話だ。

赤色のバンダナを頭に巻いたゴロツキ達は、俺と肩が触れ合った瞬間「肩の骨が折れた〜！」とか喚き出して、急に転げだし、慰謝料を求めてきた。当たり屋という奴だろう。

やられてみると分かるが、無理が有りすぎる。明からさまに折れてないのは事実だし、道を広がって歩いていた向こうが悪い。裁判所に届け出れば勝つのはこちらで間違いは無いだろう。

だが相手の怖いお兄さん方は、俺を快く見逃してくれるような雰囲気では無かった。

「… なアに黙ってんだゴラァ!!?」

近くにあったポリバケツを思い切り蹴り飛ばし、中身を狭い路地にぶちまける。

… ナマ物が大量に詰め込まれていたらしく、ものすごい悪臭が周囲に立ち込める。

… ヤバイ。

ここを早く離れたい、と思う理由がもう一つ増えちゃった。

「…… ハア……」

「ンなアにすかしてんだこッ………!!」

ドゴッ!!

俺につかみ掛かろうとした男、その体が、凄まじい音と共に吹き飛ぶ。

宙を舞い、重力の奔流に飲み込まれながら落下していく男の体は、まだ倒れていないポリバケツにぶつかり、無惨にもはいつくばっていた。

一瞬、周りの空気が硬直する。

残った男2人は、驚愕の表情を浮かべたまま、俺と、吹き飛ばされた男とを交互に見合わせている。

… 対する俺は、いたって平然でいる。

まあ、当たり前だよな。

今、この男を吹き飛ばすような一撃を叩き込んだのは、…俺なんだし。

腹部を思い切り殴り飛ばされた男は、衝撃がキツかったのか、それとも打ち所が悪かったのか、泡をくって昏倒している。

その死に顔―（死んでないけど）を見るなり、他の2人の顔もみるみる青ざめていく。

この時点ですでに残りの2人も腰が引けてしまっている様にしか見えない。これ以上やるのは野暮というものだ。

「どいてくれ。…先、急いでんだよ」

コクコクと頷いて道を開けた2人の横を通り抜け、路地の奥を指す。

後ろで「ヒイイイ！」という断末魔のような叫び声が聞こえてくるが、気にしないほうが身のためだろう。

下手に突っ掛かって行つて、仲間でも呼ばれたら面倒だし、何より関わるのが面倒だ。

………つたく。

今も昔も……俺を取り巻く環境は変わらないな……ホントに。

最初のヤンキー共を追い払った後は、他のめんどくさいのに絡まれることなく奥に進むことができた。

…まあ、さっきの断末魔みたいな叫び声にビビって出てこれないのかもしれないし、元から誰もいないのかもしれない。

どちらにせよ、今の俺にとっては好都合以外のなんでもない。

時刻は11時50分。家を出たのは6時ごろだったはずなのに、目的の場所を探しているうちに6時間も経ってしまった。

あと、10分か……

もうこれ以上、探せる時間は無い。

もしこの路地に無かったら、諦めて帰るとしようか……と決めた瞬間。

「……ん……？……これ……か？」

紙に記された住所には、確かに家屋が存在していた。

……いや。『家屋』というよりも、『廃屋』に近い。

左右に並んだビルは、表参道の建物に比べ少し老朽化が進んでいるぐらいで、まだ築10年ぐらいだろうと思えるし、まだ使われている気配はある。

……だが、この建物はどうだ？

周りの建物より明らかに老朽化が進んでおり、所々鉄骨が見え隠れしている部分も存在する。

窓は煤け、ヒビが入っているものもあれば、割れてしまっているものも存在する。

窓枠、玄関にはホコリが貯まり、長年誰にも使われていないことを証明している。

看板もサビ塗れ、穴も空きまくっている。

……どこからどう見ても、誰も住んでないだろ、ここ。

一応、スマートフォンのGPSで、目的地と現在所在地を照らし合わせてみる。

……

……GPSも、完璧にこの廃屋を示している……。

拡大縮小、再検索といういろいろやっても、何度でもこの場所が示される。

……

そうこうやっている間に、時刻は11時59分。もう迷う時間は無くなってしまった。

「……はあ……。行くしかねえか……」

意を決して、ホコリに塗れた廃屋に入ることにする。

今夜は満月。辺りを照らしているのは月の光だけである。

……真夜中で良かった。こんな場所に入っていくところを他人に見られたら、変な噂を立てられかねないからな。

入口のドアは、錆び付いたボロボロの見かけのわりに、押しただけでスツ、と簡単に開いた。鍵はかけられていないらしい。

中には月の光が入ってこないらしく、明かりも付いてない中は、数歩先からもう真っ暗で何も見えなかった。

「ごめんください……」……。

返事は無い。

帰ってくるのは俺の声、その反響音だけだった。

風の音一つ聞こえないとは……少し怖くなってきた。

流石にこの歳になって幽霊の存在を信じているとは言わないが、どうしてもここまで人氣が無いと、反射的に怖いと感じてしまう。

せめて明かりでも付けようと、電気が通っていないか確かめるため一歩前に進むと。

「う……」

パツ、と急に微量の明かりが灯り、部屋を照らした。

誰もいないはずの廃屋で、俺はまだ証明のスイッチに手を触れていないどころか、見つけてすらいらないのに勝手に光が灯るなんて……。

確かに、この空間には光が灯っている。

……ただし。……蠟燭の光……だけだな。

青白い不気味な蠟燭の灯が奥まで続き、その後螺旋を描くように

上に続いている。

光が灯っているはずなのにその周りの空間は薄暗く、火が列を成し、道を作っている様にしか見えなかった。

…不気味だ…

ガチャン！！カチツ！

「！？」

突如背後で勢い良く扉が閉じる音、そして鍵が掛かる音が鳴った。

「ちよっ……おい！！出られねえ！！」

当然のように、扉は押しても引いても微動だにしない。

なら鍵を開ければ良いと思い、内側にあるはずの鍵を探すが…さつきまで、扉には鍵が存在していたはずなのに、今その場所を見ても鍵は存在しなかった。

……この状況……

俺……閉じ込められたんじゃ……？

『……よく来たな、少年。…君が来るのを待っていたよ』

扉にかじりついていた俺の背後で、突然声上がる。

女性の声であるのは確実だが、少し低めの落ち着いたトーンなので、幼げな少女の雰囲気は感じられない。

…と、言うよりも…俺は、この声をどこかで…聞いたことがある気がする…。

声のした方向を振り返って見ても、誰もいない。

声も直接聞こえたわけでは無く、反響音の様になっていたので、そこにいなくてもおかしくは無い。

だとしたら…どこから……？

『私はここにはいない。別の所から話しているのだよ』

まるで俺の心を読んだかのように、すかさず補足が入った。

ここにはいない…ということになると、やはりスピーカーが何か使って音声を別の場所から発しているのだろう。

…いくら古い建物とはいえ、それくらいの機材は揃っているだろう。

「あんたは誰なんだ？…俺に何の用なんだ？」

この場所にいるでもない相手から返事が返ってくると思えなかったが、意外にも答えはあっさり返ってきた。

『それを知りたければ、私の元に来るといい。その道をたどればすぐだ。…待っているぞ』

「おいっ、待て！俺の質問に答えろっ！！」

…だが、その問いに答える声は無く、再び静寂が戻ってきた。

やはり真実を聞き出すには、この声の主に直接会うしかないらしい。

「…行くしかねえか…」

声が答えた『道』なるものは、恐らくこの蠟燭に挟まれた廊下を指すのだろう。

青白い蠟燭の灯は不気味でしうがな。

せつかくの決心が緩みそうになったが、それでも俺は、前に進むしかない。

…もうここまで来たら、引き返せそうにもないけどな。

「…それにしても…」

玄関から見えていた通路を通り抜け、階段の中腹辺りまで来た頃に、ふと呟く。

蠟燭の道を通っているうちに、またもや不可思議な事実気付いてしまったのだ。…この蠟燭、宙に浮いてないか…？

遠目から見ると、台か何かに乗っているものではないかと思えるのだが、どうやらそうではないらしく、蠟燭の付いた台座が宙吊りの様になっているらしいのだ。

…だが、宙吊りにしているはずの糸も見えない。

普通なら光に照らされて、多少の糸の影は見えるはずなのだが、その反射光すら見えてこない。

…どういう原理で浮いているのだろうか？
あの手紙の主に会ったら聞いておこうか。

そうこうしているうちに階段も終わり、いつの間にか蠟燭の列も無くなっていた。

そして道の先には、ゴシック調の紋様が彫られた扉があった。
ビルの外観に相応しくないほどに華美な装飾が施されており、周りのどんな風景よりも目が引かれる。

異様なまでの存在感を放つその扉に手をかけ、押し開ける。
ガチャツ…と、その見た目や大きさからは想像できないほどに軽く、あっさりと開いた。

まるで、俺を招き入れるかの様に

不意に、俺に少しのためらいが生じる。

このまま行つて、果して無事に帰れるのだろうか？
このまま行つて

俺は、人間のままでいられるのだろうか…？

何故そう思ったのかは分からない。

俺の直感が…俺の勘がそう囁いているように思えた。

…だが、もう後戻りはできない。

ここまで来た以上、俺も真実を知るべきのような気がした。
俺は決心して、目の前の扉を押し開けた。

…この選択が、自分の運命を大きく変えることになるかも知らずに……。

「……誰もいないな……」

正面の扉をくぐると、そこには洋風な居間が広がっていた。

扉の外装同様に、ゴシック調の家具、カーテン、壁紙……ありとあらゆるものと同じ装飾が施されている。

カーテンに覆われた窓にはホコリが積もっている様子もなく、清潔感が漂っている。

上に吊されたシャンデリアもこれまた華美な装飾が施されており、ダークな雰囲気醸し出している。

…。

「これ……ホントに廃ビルの中か……？」「もちろんだとも……外からだ、分かりにくいだろうけどね」

「うおっ!？」誰もいなかったはずの空間に、突如声が響く。

…デジャヴュとしか思えない状況だが、いきなり声をかけられると驚くものだと、改めて認識させられる。

声の方向……奥の扉の方を見ると、一人の少女が立っていた。

雪の如く白く艶やかな、腰まで伸びた美しいロングストレートヘア。

秋葉原でよく見かける、所謂『可愛いだけ』のゴスロリではなく、中世ヨーロッパの女性が着ていたような、不気味さ漂う『本物』のゴシック・ロリータのドレス。

現代の人間にはありえないほどに瑞瑞しく、透き通った白い肌。

……そして、その端整な顔立ちからくる、常人離れした美貌。

どれをとっても、俺が今まで見た人間の中で最も美しいと素直に

思えた。

…いや、それだけじゃない……。

俺が彼女に目を奪われるのは、それだけが理由の全てじゃない。

……もしかしたら…俺は……。

彼女に…会ったことが……あるのか……？

少女は軽く首を傾げる仕種をしてから、少し申し訳なさそうに言葉の口にした。

「…すまない。驚かせてしまったようだね」

女言葉は一切使わない偉そうな人の、見方を変えようと、相手を下に見るような口調なのだが、不思議と嫌みな感じはしない。話し手と雰囲気がついたり合う言葉と言うものは、こうも聞こえが良いのだろうか？

「…そろそろ、俺の質問に答えてもらうぞ。…あんたは何者なんだ？ポストにこの黒い手紙を突っ込んでまで、俺に何の用があるんだ？」

ジーンズのポケットから黒い手紙を抜き取り、少女の前に見せつける。

少女はその黒い手紙を見ると、再び笑みを浮かべる。

妖艶な、だが落ち着きと分別のあるような笑みは、その幼げな見た目とは相反したものであった。

つかつかと歩みより、漆黒の皮張りのソファに座り、こちらをひたと見据えてくる。

その紅の眼は、見続けていると、何時しか魂を抜かれてしまいそうなほどに美しく、澄んでいた。「…まあ、立ち話もなんだ、そこに腰掛けるといい。…話は長くなるだろうからな」俺はその言葉に甘えることにしてソファに 少女の目の前の席に、遠慮せず座ることにした。

満足そうな笑みを浮かべた少女は、更にソファに深く座り、足を

組む。

「…そうだな。何から話せばいいのか分からないが…まずは自己紹介からいこうか。」と、その前に…鏡士郎きょうしろう、茶を淹れてくれ」少女は、奥のキッチンと思われる場所に声をかける。まだ人がいたのか、と思いながらそちらの方を見る。

奥から現れたのは、美しい金色のセミロングヘアをたなびかせ、黒いスーツに身を包んだ男性だった。

年齢は…二十代後半…といったぐらいか？少女同様、その身に纏う雰囲気の違いのせいで、見かけから年齢を判断するのが難しい。黒色のフレームレスの眼鏡を掛けてはいるが、それで隠れているにも関わらず、はつきりと分かるほどにパーツの形が良く、美青年と呼ぶに相応しい顔立ちをしている。

『鏡士郎』、と呼ばれてはいるが、髪は金色、瞳は青色なので、どちらかと言えば欧州出身のような気がする。…髪は染めてあり、カラーコンタクトをしているなら話は別だが。

「はい、只今。…お客様は紅茶になさいますか？それともコーヒーになさいますか？」

「…えっと…じゃあ、コーヒーで」

「畏まりました。…暫しお待ちください」

執事は軽くお辞儀をすると、くると燕尾服を翻しながら一転して、再びキッチン（英国風に言えば厨房）の方へと戻っていった。

「彼は菊岡きくおか 鏡士郎。私の執事だ」

少女はそう、あっさりと言ったのけた。

あまり意識せずに話しているように見えるのだが…現代で従者取り分け専属の執事なんてものは、日本でも相当の金持ちにしか雇えるものじゃない。

この部屋の家具の高級感からも窺えるが、この女、どこかの大富豪の娘か何かなんじゃないか…？

「…私の名はシルヴィア。シルヴィア・ヴラード・ドラケリアだ」

少女は気品のある口調でそう告げる。

始めて聞く名前、……だがどこかで聞いたことのある名前だ。

……ドラケリア……ドラケラ……ドラキュラ……。

……いや、『どこかで聞いたことがある』じゃない。『誰でも一度は聞いたことのある』名前、だ。

「……中世以降のルーマニア独立の礎を築き上げた『ドラキュラ公』の異名を持つルーマニアの英雄にして、ブラム『ストーカー』の小説『ドラキュラ』の吸血鬼、ドラキュラ伯爵のモデルとなった人物、ワラキア公ブラド・ドラケリア三世……その子孫ってことか」

「ほう……よく知っているな」

「……一応、帝大の受験生だからな」

ドラキュラ伯爵と言えば、吸血鬼語るには欠かせない要素の一つでもある。

まあ、一般人ではそれくらい知っていればいい方だ。受験生としては、そういったことの詳細も知っておかなきゃならないのだが……まさかこんなところでその成果が出るとはな。

「……で、そのドラキュラ伯爵の子孫が、一体俺に何の様だ？」

「それは――」

「お嬢様。お飲みものをお持ちしました」

……質問の答えが返ってくる前に、どうやらお茶を淹れた執事が戻って来たらしい。

……てか、空気読めなさすぎだろ、あんた。

……ホラ、あんたのお嬢様も、思いつきり固まっちまってるぞ。

……まあ、俺には関係ないけど……。

「ふむ……ストレートティーに、この深い苦みと甘い香り……今日はダージリンの茶葉を使っているな？」

「よく分かりましたね、お嬢様。……はい、今日の茶葉はダージリンの夏摘みセカンドフラッシュを短時間抽出したもの……それをストレートに淹れたものでございます」

「やはり、お前の淹れた茶は美味いな……」

「勿体無きお言葉……」

硬直状態にあったシルヴィアは、……だーじりん？……の……せかんどふらっしゅ？……とか言う紅茶を飲んだ途端に、元の饒舌モードに戻った。

……紅茶の種類の知識なんて受験には必要無いからといってナメすぎた。紅茶とコーヒーの違いを、透明か透明じゃないかの違いで判断していた俺にとっては、このお嬢様と執事の会話は、もはや宇宙人語に等しかった。

……てか俺のコーヒー、確実にインスタントだろ。普通に喫茶店で飲むやつよりマズイし、台所に詰め替え用の袋が見えてるぞ。

「さて……ではそろそろ、話の続きといこうか」

手に持った紅茶のカップを下のソーサーにカチャリ、と置き、紅茶から目を離してこちらを再び見据える。

俺も自然とコーヒーの入ったカップを手から離し、シルヴィアの方へと向き直る。

少しだけ、場の雰囲気が変わる。

……そして、次の彼女の言葉は、俺の想像を遥かに超えた、不可思議な言葉だった……。

「君は、ヴァンパイア吸血鬼の存在を信じているか？」

「……は？」

会話開始から約1秒、早速話が脱線した様に思えた。

……『吸血鬼』とは、この世に蔓延る伝承、寓話、物語の中だけの話、その中の登場人物の一人に過ぎない、人が生み出した『偶像』の産物だ。

人の想像が生み出した存在は、あくまで想像の中だけの存在。…
だが、この女は、『それ』を信じているか、と問うてきた。

……… 新手の宗教の勧誘か…？

「用がそれだけなら、俺は帰るぞ。受験生は暇じゃないんだ」
「待ちたまえ、神谷君。まだ話は終わっていないぞ？」

俺が席を立とうとするのを制止するように、シルヴィアは話しかけてくる。

だが、俺には既に、ここにいるべき理由と言うものが消え失せていた。

「冗談じゃない！お前らのおふざけに付き合っている暇は無いんだ！宗教勧誘なら別のやつに　　！！」

「座れ、と言っている」

その瞬間、大気が揺れた。

圧倒的な威圧感、押し潰されるような感覚、……いや、それ以上に……。

純粹なる、『恐怖』

…今まで、これほどまでに『怖い』と思ったことがあっただろうか？

補色獣に睨まれた獲物……とても言うべきなのだろうか。
冷や汗が滝のように流れ落ちてくる。

やがて俺は、一つの答えにたどり着いた。

この女に、逆らってはいけない　と。

「君は…吸血鬼の存在を信じていないようだね？」

シルヴィアはソファから立ち上がり、ゆっくりと歩み始める。
軽やかな一步一步、その全てが、俺にとっては巨人の一步に等しく感じる。

そして彼女は、俺の背後で立ち止まる。

「なら、教えてあげよう。吸血鬼の存在、その真偽を　」

ドスッ………！

「これが…、真実だよ。神谷　遼君」

3章・変化と真実

突然つき立てられた、漆黒に煌めく短刃。

先端は細く尖っており、『切る』と言うよりは『差す』ことに特化した形状をしている。

そんな細身の刃に対して、鰐は横に広く、腕を守る様に造られている。

何よりも、その刃は中途半端で、レイピアに分類するには短すぎで、ナイフに分類するにも長い。

…だが、問題はその形状等ではない。

漆黒の刃、その先端に滴る赤い液体……。

俺の中を流れていた……俺の血だ……

「な……に……しやが……る……」

意識が突然の出来事についていけないのか、痛みはさほど感じなかった。

だが、腹部から流れ落ちる血だけは、止まることを知らない。
「……ふむ……君から、いかにも『証拠を見せろ』という意思を感じたので、証拠を見せたただけだが？」

特に悪びれた様子もなく、少女は俺の背中越しに、平然と答える。
俺の腹から突き出た血の付いた短剣　黒のマンガOSHUを右手に握ったままで、少女は立ち続けている。

次第に驚愕は痛み姿を変え、溢れ出る赤い液体にも意識がまわってくる。

「うつ……あつ……がつ……!？」

突然、刃がいきなり視界から消える。

ズズッ、と何かが引きずられる様な音が、腹の奥底から響く。

…と同時に、止まぬ腹部の痛みが激しさを増す。

腹部から抜き去られた刃には、大量の血が付着しており、黒色の本体が見えなくなるほどに血の赤で染まりきっている。

刃によつて塞き止められていた傷口も、その堰が消えた事により開き、それによつて血の流れ出す勢いも増していく。

「そう喚くな。ほおつておいても死にはしない」

シルヴィアは、抜き取った黒い短剣を振るい、血飛沫を床に飛ばす。

ゴシックドレスやその白く細い手にも大量の血が付いているが、まるで気に求めず、指に付いた血液を舐めとっている。

…それも…恍惚とした…表情で…

「そして、ホラ。君は今、自分の軀からだをもつて、一つの事実の証明したではないか？」「…しょう…め…い…」？」

流れ出る血を少しでも抑えるように傷口に手を当て、近くの壁に寄り掛かるようにして何とか体を支える。

短時間で大量の血を失いすぎたせいか、視界が揺らぐ。

白色のシャツは完全に赤い血で染まり…、だがなお染みは広がりに広がっている。

激しい痛みも、既にそれを通り越して痺れに変わっている。

これが、一体何を示しているのだろうか…？

彼女が俺を刺したこと、そして俺が死にかけていること…そのことに、一体何の意味があるのか。

シルヴィアは、何を見ているのか、さらに笑みを増す。

俺の死を喜んでいるのか？…いや、そうではないだろう。

あの目は、あの目が示すものは

「ッ!?!」

「……ようやく気付いたようだね。……自分の身に起きていることに」

その事実気付いた……いや、気付かされた俺は、その真相を知るべく 血塗れのシャツの裏側のソレを確かめる。

「……!!」

嘘……だろ……?

傷口は…完全に塞がっていた

血は確かに、傷口があつた場所の周囲にこびり付いてはいる。…だが、それが噴き出したと思われる穴が、どこにも存在しなかった。知らぬ間に痛みも消え去り、荒れていたはずの呼吸も整っていた。血をだいぶ失っていた筈なのだが、貧血を起こしているわけでもなく、意識を失わずに立っていられている。

それに、この出血量で、普通なら生きていられるわけが無い。

『普通』…なら…

「そう。君が今知った事実……それこそが、この世の真理なのだよ」

シルヴィアは、その不気味な微笑みを一層深め、擲つ様に言い放った。

「君は、人外の存在……、『ヴァンパイア吸血鬼』となったのだよ」

「……俺が……吸……血鬼……」

「……？どうした、何か問題でもあるのか？それとも……まだその事実を信じているのか？」「……いや、そういうわけじゃない。……まだ、状況が飲み込めてないだけなんだ……」

「ここまで懇切丁寧に教えたというのに……まだ理解できていないのか！？……君は他の人間と違って物分かりがいいと思っていたのだが……私の考え間違いか……？」

人の腹ブツ刺して殺しかけたやつが何を言っているんだと言ってやりたかったが、死んでないので結果オーライ、真実を知れたのだから得をした、みたいに軽く思っているのだろう。

……無事だったから良かったものの、死んでたら俺はただのやられ損じゃねえかよ。

悪気もなく首を傾げて疑問符を浮かべるシルヴィアを見ると、何だか怒る気も失せ、怒りも冷めてきた。

「……いや、そうじゃない。……確かに、全部を理解したわけじゃないけど、とりあえず今は、その『吸血鬼』ってやつを信じるしかない状況にいることは分かっている」

「なら」

「問題は、……そこじゃない。俺が疑問に感じているのは、俺がいつ『吸血鬼』になったかってことだ」

「……ふむ……それは確かに、もったもな疑問だな」

腕を組んだシルヴィアは、納得したように落ち着き、再びソファに腰を下ろした。

俺も、なるべく血を付けないようにしてソファに座る。

……正直、俺もまだこの事実を完全に飲み込めたわけではないし、

俺が伝説にしか聞かない化け物、『吸血鬼』になったことも信じられない。

…だがしかし、同時にそのことが真実だとするなら、今までの不可思議な出来事の証明が可能かもしれない、という考えに至っているのも事実だ。

目には目を、歯には歯を、超常現象には超常現象を……というやつだ。

…だから、今だけはこいつの話を、信じてやってもいいのかもしれない。

…そう、考えた。

シルヴィアが鏡士郎に昼食（朝の、しかも1時をまわったばかりだというのに）の支度を命じ、彼に席を外してもらってから、ようやく本題に入ることになった。

「…君に話そうと思っていた二つ目のこと……なんだが、実はそれこそが、君が吸血鬼もどきになったことに関係しているのだ」

「…どういうことだ？」 話にくそうに口火を切ったシルヴィアの言葉に、反射的に言葉を返す。

シルヴィアが俺のことを吸血鬼『もどき』と指したことに疑問はあるが…何よりもその『二つ目』の話について興味が沸いて来る俺について関係ある話なら、なおさらだ。

「…ふむ……どこから話せばいいのかわからないが……そうだな。

君は、一週間前、4月18日の夜のことを覚えているかい？」

「一週間前……？」

…確か、丁度俺の記憶に穴が生じている時間帯だったはずだ。

その同時刻には、六本木の辺りで殺人未遂事件が起きている。

…それらのことに、何か関係があるのだろうか？

「…いや。その日の夜のことは、何故か全く記憶に残ってないんだ。…すつぽりと抜け落ちたみたいにな」

「…ふむ……やはりそうか……」

まるで俺の答えを予想していたかのような反応を見せた。

…やはり、こいつは俺の抜け落ちた記憶の、その内容と真実を知っているらしい。

「知ってるなら教えてくれ。一週間の夜、俺の身に何が起こったのかを」

「…そうだな。…あの夜に殺人事件が起きたことは知っているかい？」

「ああ。丁度俺の記憶が途切れてる時間帯って事も知っている」

「…そうか。…実はな」

「…あの日、殺されかけていたのは、君なんだ」

「…やっぱりな」

薄々、その事実には気付いていた。

何故俺の記憶がすつぽり抜け落ちていたのかも、その時のシヨックであるなら、ある程度の納得ができる。

傷が癒えるのが早い吸血鬼になった…っていう事実も合わせれば、次の日平然としていられたことも辻褄が合う。

「…感づいてはいたようだね。なら率直に言おう。…君が吸血鬼になったのも、その夜だ。『切り裂きジャック』の手によってね」

「切り裂きジャック……！？」

話には聞いたことがある。

確か…十九世紀末のイギリスで起きた未解決の猟奇殺人事件、『切り裂きジャック事件』……その犯人である、正体不明の殺人犯。

被害者の喉を掻き切り、内臓をえぐり取り、売春婦のみが、その男に殺されたと聞く。

…だが、その事件は百年以上も昔の話だ。二十一世紀の今、その事件、そして犯人が関係しているとは思えないが……。

「『切り裂きジャック』は、人ではない。…『吸血鬼の』殺人鬼だ」

「…なんだと？」

「嘘など付く意味が無いだろう？これは紛れも無い事実……とはいえ、我々『王の一族』^{アルカード}の者しか知らない事実ではあるがな」

「ある…か…ど…？」

聞き覚えの無い言葉を聞いた俺の呆けた反応に、シルヴィアは顔色一つ変えずに続ける。

「吸血鬼の王族のことだ。…日本の中で例えるなら…そうだな、天皇と総理大臣が合わさったものだと思えばいい」

「…要するに、吸血鬼の元首であり、最高権力者でもあるってことでいいんだな？」

「察しがいいな。…そう、私たちドラケリア家を筆頭とし、カルンスタイン家、クロロツク家、バードリ家、レイ家の五家……とはいえ、バードリ家レイ家は、エリザーベド・バードリ、そしてジル・ド・レイの代で潰れてしまって、すでに存在しないから、性格には三家ではあるがな」

エリザーベド・バードリと、ジル・ド・レイ…。

どちらの名前も、つい最近やっていたテレビ番組で流れていた名だ。

エリザーベド・バードリは、十六世紀から十七世紀のハンガリー王国の貴族であり、及んだ残虐な行為の数々や、処女の血肉を嚼つたことなどから、『血の伯爵夫人』の異名を持つ連続殺人犯。

もう片方のジル・ド・レイは、かの有名なジャンヌ・ダルクと共に百年戦争を終結させ、その後、錬金術に没頭した挙げ句、百人を優に超える数の少年を惨殺した狂気の殺人者。

…どちらも『虐殺』を行い『吸血鬼』のモチーフとされた人物じゃないか。

カルンスタイン家とクロロック家には……あまり聞き覚えがないが…。

『王の一族』と言うだけあるからには、そこそ有名なのだろう。

「…そろそろ、本題に戻るとしようか。先程、切り裂きジャック事件は吸血鬼の仕業、というところまでは言っただけだな？」

「ああ」

「更に付け加えるなら、まだ切り裂きジャックは現在なのだ」

「…なに？じゃあまさか」

俺の言葉を遮るようにして、シルヴィアの口から信じなくなかった事実が告げられる。

「その通り。君を襲った犯人は…『切り裂きジャック』、模倣犯などではなく、その本人だ」

「…馬鹿な…そんな筈が……」

『切り裂きジャック』の犯行は、必ず喉を裂き、内臓をえぐり取るという方法で行われており、更に標的は必ず売春婦 女性であったはずだ。

俺が標的になる理由なんてあるはずが無い、と言う考えは、続くシルヴィアの発言によって打ち消された。

「…『切り裂きジャック』と言う通り名は、あくまで『切り裂きジャック事件』の中だけの呼び名だ。彼が、必ずしもその事件にだけ関わっているとは限らない……」

「…まさか…他の未解決殺人事件の中に、その『切り裂きジャック』の犯行によるものがある、ってことなのか……？」

「その通りだ。…正確にはほとんど、というべきだがな。彼の標的は、なにも女性だけに限られたことじゃない。男でも女でも、子供でも老人でも……誰でも標的になる。君も勿論、例外では無か

った、ということだ」

「…マジ…かよ」

十九世紀以降、世界には、何件もの迷宮入りになった事件が存在する。…そしてもちろん、犯人の正体すら掴めていない事件も少なくは無い。

…もし本当に、それら未解決事件のほとんどに『切り裂きジャック』が関わっていたとしたら、俺が標的になった理由も分からなくはない。

「もしかして、最近この辺で起こってる『切り裂き魔事件』セカンド・ジャックにも、それが関わっているのか？」

『切り裂き魔事件』。

最近、東京都のあちこちで無差別に行われている連続殺傷事件の通称だ。

十人ほどの被害者に共通するのは、年齢が十代後半から二十代前半ということだけで、血縁も職業も性別もまばらである。夜遅く、人通りの少ない路地裏などで犯行は行われている。

ここまで見ただけなら、到底『切り裂きジャック』を彷彿とさせるような事件ではないと思うだろう。

問題は、その殺害方法だ。

この一連の犯行に関すると思われる全ての被害者は、鋭利な刃物で喉を切り裂かれた後、心臓をえぐり取るという方法で殺されている。

ただ、残虐なだけじゃない。そのやり方が、あまりにも『切り裂きジャック』に似通っているのだ。

故に、この通称で呼ばれるようになった。

「君の聡明さには本当に敬意を抱くよ。…その通り、君も見方を変えれば『切り裂き魔事件』の被害者の一人ということだ。

もつとも…君は喉も斬られず心臓も取られず……、そもそも殺されてもいないのだから」

「なら…なんで『切り裂きジャック』は俺を殺さなかったんだ？殺す相手に情けを懸けるようなやつじゃないと思うが……？」

「そこまでは私にも分からない。君に何か感じるものがあつたのか、それとも殺せない理由があつたのか。…そもそも端から殺す気が無かつたのか……、だから」

話の途中、シルヴィアは急に立ち上がり、俺の左胸　心臓がある位置を、腹越しに人指し指でトン、と軽く突く。

「君の中に、奴が『因子』を残したのは、確実だ」

「…『因子』？」

「そう。吸血鬼であるために必要なモノ。見たままを言えば、吸血鬼の『血液』だな」

「…つまり、吸血鬼の血が俺の体の中に流れ込んできたから、俺は吸血鬼もどきになったってことか？」

「そういうことだ。理解が早くて助かるよ」

昔から吸血鬼というものは、吸血されればその人間も吸血鬼と化し、その吸血鬼がまた他の人間に噛み付き、その人間を吸血鬼に変えていく…といった感じに、無限に増殖する存在として描かれることが多いが……どうやら本物の吸血鬼様がおっしゃることからだと別にそういうわけではないらしい。

『因子』というものは言わば、HIVウイルスの様な、血液感染によって広がる、ウイルス性の何かの様なモノであり、HIVウイルスによって引き起こされるエイズのように、一度感染してしまえば二度と元には戻らない　つまりは人間には戻れない、ということらしい。

「 どうして君は、そこまで落ち着いていられるの？…普通の人間なら、今の話を聞いた途端に泣き喚き、『元に戻してくれ！』などと縋り付く、などしてもおかしくはないだろうに」

シルヴィアが俺の顔を覗き込むようにしながら、怪訝そうな顔をする。

…つい最近までただの一般人だった俺が、いきなりこんな状況に陥ったというのに落ち着いていることに驚いているのだろう。

…って、言われてもなあ……。

「 まだ、あんまり実感が湧いてないんだよ。自分が殺されかけたことも、吸血鬼になったことも…。もしかして吸血鬼って、人間と体の造りは大差ないんじゃないか？」

「 …厳密には違う点もあるが…確かにその通りだ。ほとんどが人間の創作による『設定』だからな。…十字架、聖水、銀、ニンニクに弱いと言うのはもちろん嘘、太陽の光に当たると灰になってしまうのは、少々大袈裟に言い過ぎだ。あくまで私達は、日光に含まれる強力な紫外線に弱い肌の造りをしているだけなのだからな。…あとは、少し人より頑丈なくらいだ」

「 それはさつき実践させられたから分かるけどさ……俺、この一週間で日光に当たりまくったんだけど……大丈夫なのか？」

今さらながら心配になってきたのだが…俺はこの一週間、自分が吸血鬼になったことを知らなかったため、普通に日中外を出歩いていた。

吸血鬼としては中途半端である俺も、流石にその点だけは心配になっってしまう。

「 心配しなくても、君に流し込まれた血の量は微々たるものだ。どちらかと言えば、体質的には人間に近いだろうから、日の光の影響を受けることはないだろう。変わっているところと言えば、人間にしては高すぎる身体能力と打たれ強さぐらいかな」

「 ならいいんだが…」

反応は薄いが、内心はとてつもなくホッとしていた。

死亡診断書に『死因・日光による突然死』なんて書かれたら、末代までの恥だ。

「……まあ何にしろ、今の我々がすべきことは、たった一つ」
シルヴィアが、俺の目の前で人差し指を立てる。

雪のように白く、繊細な指先は、握っただけで折れてしまいそうな感じすらした。

「『切り裂きジャック』の正体解明、及び連続殺人の阻止……それだけだ。……協力、してもらえないかな？」

立てられた指は下ろされ、代わりに握手を求めるように、手が差し延べられる。

「……嫌だ……とは言わせてくれないんだろ？」

「フフツ……もちろんだよ。……ここまで教えたんだからな」

最後の言葉を交わし、お互いに微笑み合ってから、俺はシルヴィアの白い手を握る。

冷たいと思われていた手は意外と暖かく、血が通った、俺と同じ『生物』であることを示していた。

そうだよな。

この世に人間という存在があるように、吸血鬼という存在もまた、他の生物と同じ様に極当たり前の様に存在しているんだ。

信じてみても、いいのかもしれない。

例え、こいつの話したことが馬鹿げた話であつたと言われたにしても、こいつはそれを真実だと言っているんだ。

実際は誰もこいつの話を否定できはしない。真実かどうかなんて確かめようがない。

だったら、信じてやりたい。協力してやりたい。

……心から、そう思えた……。

「…お嬢様、昼食の御用意をお持ちしました」

「ご苦労様、鏡士郎。…今日の食事相変わらず美味しそうだな。流石は私の執事だよ」

「勿体無きお言葉、嬉しく思います。それはそうと、お嬢様…」

「遼が居なくなった部屋、鏡士郎がテーブルに昼食を運んで来る。流石に血塗れになった服で帰るわけには行かないので、風呂場で血を洗い流してもらっている。」

時刻は午前1時30分。私達吸血鬼にとっての昼食をとるべき時間だ。

…まあ、人間の彼からしてみれば、この時間は普段なら寝静まっている時間帯なのだろうがな。鏡士郎が淹れ直した紅茶の香りを私が味わっている時に、鏡士郎が不意に質問をしてくる。

「どうやら、話自体は厨房からでも聞こえたらしく、私が遼に教えた内容はほとんど把握しているようだった。」

「どうした、鏡士郎。何か気になることでもあるのか？」

「いえ、気になるというほどでもありませんが……、彼…神谷 遼様に、伝えていないことがあるのではありませんか？」

「…ふむ……アレのことか。…今はまだ、話すべきでは無いと思うたから、敢えて言わなかったのだが……」

「…と、言いますと？」

血が付いたテーブルクロスは取り替えられ、綺麗に片付いた食卓の上には豪勢な食事が並んでいく。吸血鬼は基本、野菜を取らなくても生きていけるため、牛肉を中心とした食事を取ることが多い（豚肉も食べないことはないが、滅多に食卓に上がることはない）。その名の通り、人の血を飲むこともあるが…、美味である故に手

に入り難いということもあるから、普通の吸血鬼は基本、動物の血を飲むことが多い。

…とはいえ、飲まなければ死ぬというわけではなく、生きていく分には何の問題も無い。

「…今の彼には、必要の無い情報だと思う分もあるが……何より、これは彼のためでもあるからな」

紅茶を啜り、音をたてないようにテーブルに置き……

…その、言葉を……

「…『狂気の因子』…彼がそのことを知れば」

…言い放つ。

「私は、彼を殺さなければならなくなる」

4章・風呂場と宝刀

「本当に、塞がってる……」

温かいシャワーを体に浴びつつ、腹の傷　シルヴィアに刺された場所だ　がある場所：正確には、傷が存在したはずの場所をなぞりながら呟く。

シャワーを浴びる前は、まだ黒々しい血が肌にこびりつき、流血はまだ止まっていない様な気がしたのだが……。

「俺：^{ヴァンパイア}吸血鬼になっただんだ……」

改めて口にしてみても、やはり実感はあまり湧かない。

傷口は綺麗に塞がり、元からそこには何も無かったかの様に跡一つ残っていない。

痛みも無ければ、疼くこともない。……まるで刺された事実自体が嘘であるかの様に。

血の流れも……正常だ。致死量に匹敵するほどの大量の血を流したと言うのに、貧血すら起こしていない。

……変化というものは、自分が気付かぬ間に突然訪れ、そして自分が元からそうであるかの様に溶け込んでいく。

誰も気付かないぐらいに小さな変化も、立場や生き方を大きく変えてしまうくらいに大きな変化も、自分にとっては同じ、『変わらぬ事象』として思い込まれてしまう。

……それが例え、別の種族　吸血鬼への変化だとしても……。

「…ふう……」

風呂場全体を見回すと、あらゆる所が光り輝き、一人で使うには広すぎる浴槽に、少し居心地が悪くなる。

外見はアレなクセに、何故ここまで内装は豪華なのか。……それと、何故ライフラインが通っているのか、という疑問が浮かぶが、あえて考えないようにする。

何だか湯舟からは薔薇の香りがするし……いかにもどこかの大富豪なんかが入りそうな超豪華な風呂だな…。

庶民の俺にとっては、疲れが取れるどころか、逆に肩が凝りそうな気しない。

…何だか浸かってはいけないような感じがする。

ただでさえこんな豪勢な風呂に入らせてもらっているのに、さらに金をかけられた様な湯舟に浸かるなど、おこがましいにもほどがある。

…単にこの薔薇臭い風呂に入りたくないっていうのが一番の理由ではあるのだけだな。

というか、今すぐにもこんな風呂出てしまいたい。シャンプーはラベンダー臭いし、ボディークリームはシトラス臭くて堪らん。

…貴族ってのは、こんなに臭いのキツイものしか使わないのか？とにかく、この鼻の曲がりそうな空間から逃れなければ、風呂に入った意味も無くなる気がする。

なので、とつと場所から脱出してしまおうと、風呂場の引き戸に手を掛けようとする。

…だが。

ガラララッ。

スカッ。

「あれ？」

俺が触れる前に、扉が勝手に開く音がする。

いくら貴族の家だからとはいえ、風呂場に自動ドアが取り付けら

れるほどに余裕が有るとは思えないし、そんなことする貴族なんて聞いたこと無い。

…第一、入ってきた時にはただの引き戸だったじゃないか。

そうなると他には、別の誰かが入ってきたとしか考える余地が無い。

今日…というかついさつき、この家にいる人物をパツと確認させてもらっていた。

今この家にいるはずの人間　もとい吸血鬼は確か、シルヴィアと鏡士郎の二人のみ。メイドも召し使いも家族もいなかった。

ようするに、今この場にいるはずなのは、俺と同性の…鏡士郎であるはずなのだ。

（なんだ…なら別に気にする意味はないな…）

…と思つて、少し上を見たのが間違いだった。

「…えっ？」

「…はっ？」

最初に視界に飛び込んできたのは、薄い布地に包まれた、白い肌と二つの膨らみ。大きくも無く小さくも無く、健康的としか言いようが無いサイズだ。

…あの細身の執事、こんなにバストサイズがでかかったっけな。

その次は、細い首元のライン。綺麗な鎖骨が目飛び込んでくる。

鏡士郎は筋骨隆々と言うほどガタイが良いわけではなかったが…、ここまで細く括れていただろうか。

最後に、顔。血色のいい桜色の唇、形のいい鼻、紅く紅潮した頬、驚きと羞恥に満ちた目。

ここまで確認して、俺はようやく、目の前の事実と、自分に

これから起こるであろう事を悟った。

…目の前にいるの…シルヴィアじゃん。

さっきまでの露出度0に近かったゴシック・ドレスを脱いだシルヴィアは、着痩せするタイプなのかはたまた服の形が悪いのか、意外とスタイルがいい体つきをしていた。

一応タオルで胸から太ももの辺りまではタオルで隠しているものの、ほぼ全裸に近いその恰好は、先程まででかい態度をとっていた吸血鬼のお嬢様の姿とは、まるで別物であった。

「…」

目と目が合ってからすでに30秒近く経っているというのに、一向にシルヴィアの反応はない。

…バグったゲームソフトみたいに硬直しており、視線の位置がまるで変わる様子がない。

「…え…えつと…大丈夫か？」

さすがに放置したままにしておくのはマズイかなと思った俺は、取り合えず声だけはかけてみる。

そしてそれとほぼ同時に、今の行動が俺に更なる悲劇をもたらす引き金であったことを悟った。

「?????ツ!!!」

俺の言葉によって硬直を解いたシルヴィアは、風呂に逆上せたでもなく急速に顔を赤らめ、言葉に成らない叫び声をあげる。

白い肌が急に真っ赤になって、まるでリトマス試験紙の如く色の変わり様だな、と頭の中で冗談を思いついた次の瞬間

「うごはッ!!!!?」

突如視界が歪み、腹部に強烈を軽く通り越して激的な衝撃が発生する。

発生源は、勿論シルヴィア。使用された鈍器は、吸血鬼の血

によつて強化された強靱な右足と、それを圧倒的なスピードで奮う驚異的な脚力―（付け加えるなら、彼女の俺に対する怒り…か？）。棒立ちで啞然としていた俺は、当然防御は愚か、反応すら出来なかったので、シルヴィアの蹴りはノーガードでダイレクトに直撃。その衝撃は、俺の脇腹に多大な損傷を与えてくれやがった。しかも人の蹴りならまだしも、こいつはそんな柔なもんじゃなく、歴とした吸血鬼。その蹴りの鋭さは、ムエタイ選手も裸足で逃げ出しそうな、違う意味での『岩をも砕く』威力を持っている。

当たり所が悪かったら、即死だったかもしれない。

…しかし、それだけで済むはずが無かった。

音速に迫る速さの蹴りは、音速に迫る運動エネルギーを俺の体を与える。

脇腹の骨が折れたような鋭い痛みを感じる暇もなく、俺の体は背後の壁に向かって宙を突き進む。

しかし、その疾空感―（というよりただの恐怖）も一瞬で途切れ、俺の体は急停止を実行しようとした。

風呂の壁に、体感速度時速何百キロものスピードで衝突した俺の体は壁に減り込むと思いきや、余程壁の対衝撃性能が高いのか、石のパネルにぶつかったただけであった。

背中に激痛を感じたのもつかの間、壁に張り付いた体も重力には逆らえず、パネルに引つ付いたままズリズリと滑り落ちていく。

が、たかが一撃で女子おんなの柔肌を晒してしまったお嬢様の猛攻は止まりはしなかった。

透かさず落ちていた金メッキのスチールたらいを掴んだシルヴィアは、プロ野球選手も青ざめるほどの剛速球ならぬ剛速盤たらいを投げつけてくる。

「ぬおわッ！！？」

何とか意識を保っていた俺は、首を少しだけ左にずらしてそれを避ける。

ドゴーン、と盛大な音と土煙、その後のガラガラという何かが崩れていく音を聞き終え、むせながら右隣を確認する。

さっき俺がぶつかってもびくともしなかった壁に、鉄製のたらいが見事に減り込んでいる。

これがもし俺の頭に当たっていたとしたら……。

「いつ、いきなり何しやがるんだよっ！？」

「うるさいッ！！黙って死ね！！」

理不尽過ぎる。

有無を言わず、さっき「協力しよう」といった相手を、たかが一度の覗き（俺はそんなことしたつもりは無いが、恐らくそう認識されているだろう）で殺そうとするなど、幾ら何でも無茶苦茶だ。

中学の時、幼なじみの少女の家に泊まりに行った際、（不可抗力とは言え）風呂に入っている所を見てしまった時でも、「もう絶交するから」と言われ、約一週間口を聞いてもらえなかったことはあったため、年頃の少女にとって、風呂を覗かれること　もとい、裸を見られることが、どれだけ恥ずかしいことなのかぐらいは理解しているつもりだった。

少なくとも、この時までは。

「まっ、待て、シルヴィア！これは事故だ！不可抗力だ！俺は何も

」

「うるさい黙れ死ね消えろこの下等変態新人類ッ！！」

さっきの悪態に何個か新しい単語が混ぜ混まれ、新たに投げ飛ばされる飛来物という余計な手土産と共に、俺の下に帰ってくる。

…下等変態『新人類』って……。さっきアンタが俺を『吸血鬼もどき』になっただって言ったばかりじゃねえのかよ。

『下等』と『変態』にも、色々と批判したいポイントが有るのだがそれは後回しにして、今は眼前の修羅を止めることが先決だ。

「おっ、落ち着け！！風呂場で死人を出す気かよ、お前は！」

「それも止むなし、だッ！！」

ヤバい、こいつ平常心を失ってやがる…。

風呂場に置いてあるものを手当たり次第に投げまくってくる鬼ならぬ吸血鬼は、まるで止まる様子が無い。

一応持ち前の反射神経の良さでなんとか全部避けてはいるものの、機関銃の弾の如く連続で襲い掛かってくるのを避けきるのに相当体力を消耗してしまう。

これでは、こいつの行動を止めなければ、いずれ俺の心臓の鼓動が止まってしまう気がする。

「ちょこまかとオ……逃げるなア……！」

大きく振りかぶって、シルヴィアが投げつけてきたチャンプーの予備ボトルが、遂に音速を超えた。

ちよっ……！こんな避けきれるわけがッ……！！
「ぐおッ……！！」

反応がほんの一瞬どころか完全に遅れてしまった俺の顔面に、容赦無い一撃が叩き込まれる。

薄れゆく意識の中で、俺はただ痛感した。

女の子って…怖え……。

俺は、あれから1時間ほど意識を失っていたらしい。

何かがたたき付けられたり、破碎されたりする音を聞いた鏡士郎が駆け付けた時には、時既に遅し、俺は風呂場のタイルの上に大字で伸びていたらしい。

背骨にはヒビが入り、肋骨を何本か骨折、頭部に激しい打撲……。正直、吸血鬼の驚異的な再生能力と頑丈さが無ければ、今頃天に

召されていたのかもしれない。実家での習慣で、タオルで下半身を隠すようにしていたからこれくらいで済んだのだと思うべきなのか…。

後で鏡士郎に聞いた話なのだが…曰く「お嬢様は激怒なされた時の仕打ちは、あんなものでは済みませんでしたよ」らしい。

…あれでまだ激怒状態じゃないのかよ。これ以上のキレっぷり見せられたら、吸血鬼になったとはいえ、流石に体が持たないぞ。

…あの怒りっぷりでも、人間が相手なら死人が出たかも知れないのだが…。

「全く！君がそこまで淫猥な男だとは思わなかったぞ遼ッ！」

「…だから不可抗力だつってんだろ。俺にどうやってあの状況を回避しろってんだよ……」

羞恥のあまり顔を真っ赤にするシルヴィアは、風呂上がりだというのに、また似たような露出の少ないドレスをまた着ている。…同じのを何着も持つてるのか、それとも着回しているのか…。

肌はしっとりとし水気を含み、表面にはツヤが現れている。触るとモチモチと弾力があって柔らかいんだろうなあ……。

などと思っていると、俺の視線に気付いたシルヴィアはこちらを振り返り、そのしかめっ面の深みを更に増す。

「何をそんなに変質者の眼差しでジロジロ見ているのだ？…その目、潰してやろうか？」

「怖いこと言うなよ…裸を見たことはさっき散々謝ったし、手痛い仕打ちも受けてやったんだから、そろそろ機嫌直してくれよ？」

「……変態と聞く口は持ち合わせていない」

だめだこりゃ。

完全にヘソ曲げてやがる。

こういう時は、何か女性を喜ばせるようなことをしてご機嫌取りをするのが定石であると聞いたことがある。

…だが、俺に女性を気遣う才能は皆無、昔から『女心と秋の空』と言っように、俺はまるで女性の心境が理解できなかった。…とい

うか、周りにいる女性が、母親と同一年の幼なじみぐらいだったから、別に理解しようと思ったこともなかった。

方程式でも、法則でも、ましてや単純な暗算ですら説明かせない女性の心は、俺にとってとはどんな難題よりも遥かに理解しがたいものだった。

なので、今の俺にこいつを宥められるだけの手段がない。

故に、俺に出来そうなことはただ一つ。

「そもそも、なんでお前は俺が入ってる風呂に入ろうと思ったんだよ。脱衣所に俺の時計と財布が置いてあったはずだし、それ以前に誰かが入ってることぐらい分かるだろ、普通」

俺が風呂場不法侵入の原因を問おうとすると、さっきまでのおしとやかさは何処へ、冷静さを完全に欠いた様子で、シルヴィアは返してくる。

「そんな小さなものの気付くはずが無いだろッ！…脱衣室から君の服を持って出てきた鏡士郎が『遼は既に風呂から上がった』という旨の発言をしたのだ！明かりが燈っていたのは、単に付けたままにしてあるだけなのかと思った。それ以外に理由はない！」

「……あのさ、嘘付くなら、もっと上手くやれよ。…俺は風呂入る直前に、お前んとこの執事に直接服を預けてんだから、アイツがそんなこと言うはず無いし、そもそも あれ？」

その話に、一つの小さな共通点を見つける。

シルヴィアもそのことに気付いたのか、下を向いて考えこんだ後、ハッとなって顔を起こした。

「…もしかして…だが、この一件」

そう、俺とシルヴィアの…二人の話に共通していたこと……それは『タイミング』だった。

俺がアイツに服を預けたのは、風呂に入る直前。そしてシルヴィアが鏡士郎に会ったのは、洗面所の扉の前（と推測できる）。更に言えば、シルヴィアが風呂に入ってきたのはその直後。

……と、すれば、即ちこの一件は

「……鏡士郎の所為かつ！！」

さっきまでの口論がまるで嘘のように息ピッタリに声を揃えて叫んだ俺とシルヴィア。叫びざまに立ち上がり、真つすぐに廊下に繋がる扉目指して進みだす動作までシンクロする。

そして、俺達が同時にドアノブに手を掛けようとする寸前、扉が廊下側に開かれる。

中に入ってきたのは勿論、この状況を楽しみ尽くしていると思われる外道執事、菊岡 鏡士郎。

トレイの上に二つのティーカップと、鞘に納まったナイフの様なものを乗せ、何事もなかったかのようにしている。一つ壁の向こうなのだから、俺とシルヴィアの騒ぎ声は聞こえていたはずなのだが、反応が何も無いと余計に腹が立つ。

「失礼します、お嬢様。お茶と、お申しつけなされたモノを持って参ります」

「鏡士郎ッ！！遼から全てを聞いたぞ！！……ようするに、全部お前の所為ではないかッ！！」

鏡士郎が何かを言い終える前に、シルヴィアが思い切り突っ掛かっていく。

手足をぶんぶん回しながら、顔を真つ赤にして殴り掛かろうとしているが、鏡士郎は笑顔のままトレイを持ってない左手で頭を押さえ受け止めている。

いつもこんな茶番をやっているのか、鏡士郎はかなり手慣れた手つきで目の前の小猛牛をいなしているし……その小猛牛ことシルヴィアは、鏡士郎より短い腕をグルグル回して、届かない距離を必死に埋めようとしている。

……おい主人。それでいいのかよ。

ムキ؟؟ッ！！となつて回転速度を増した腕で更に攻撃を仕掛けようとしているが……無駄。幾ら腕を速く回しても、鏡士郎の腕の長さを超えることなんて出来ないからな。……というか、いい加減学

習しろよ。物投げるとか押さえてる腕を殴るとかしないと、鏡士郎に一矢報いることなんて夢のまた夢だぞ。

アハハッ、とこの状況を楽しんでいるように笑いながら、鏡士郎はトレイを机の上に置き、そのまま話し出す。

「お嬢様がドラケリアの屋敷の外に出られてから、まだほんの一年ほどしか経っておりませんので……一つ、異性の方と触れ合う機会を持つのも、良い経験となるのではないかと思います……。差し出がましいことをしました、申し訳ありません、お嬢様」

「その言葉を、笑みを浮かべたまま言うものだから、こいつからはまるで反省してる様子が伺えない。」

しかも、その言葉の中にあつたのは全部シルヴィアに対する謝罪のみ。俺に対しては、『少しも』どころか『全く』謝罪の意志を示していない。……というかたぶん、こいつは俺に謝る気が無い。一番の被害者はどう考えても俺であるはずなのに。

「そろそろ見ているだけの立場にも耐え切れなくなって、シルヴィア同様直接攻撃を仕掛けに行つてやろうと思って、立ち上がるうとした瞬間」

「鏡士郎！お前は一つ、とお？？？？つても、大切なことを忘れてる！」

シルヴィアが、俺と鏡士郎の間に（元々そこにいたのだが）割つて入って、仁王立ちになり腕を組んで立つ。

さっきの……会った直後の妖艶な第一印象からは、想像の斜め上に行くほどの甚大なキャラのズレっぷりだが、そこはあえてツッコまないようにしておく。

シルヴィアがなにを言おうとしているのかは分からないが、何か強い意志を感じる……気がした……はずなのだが……。

「だ、男女のお付き合いは……まっ、まず……、手を繋ぐことから始めるのが定石であろうがッ……！」

「ツッコむ所そこじゃねーだろうがッ……！……てか、どれだけ初心なんだよ、お前ッ……！今時そんなことから始める奴なんてほとんど

いねーよッ！！！」

頬を染めながらもの凄くレベルの低いことを言うシルヴィアに、柄にも無く思い切りツツコミを入れてしまった。

多分、本人は真面目も真面目、大真面目に言ったのだろう。顔がどんどん紅潮していつてるし。

けれど、あくまで人間の常識の中にいる俺にとってその姿は、異性との接触がまるでない箱入り娘、未経験の処女にしか見えない。が、ここでまた、俺の想像を絶する出来事が起こってしまった。

「申し訳ありません、お嬢様。私は……間違えておりました、そんな簡単なことすら……」

「うむ。分かればいいのだ、分かれば」

…鏡士郎が、素直に謝りやがった。深々と頭を下げながら、慇懃無礼に。

ふざけているのか大真面目なのかは、頭を下げているため表情が読めないから分からないが、形だけなら非常に丁寧な謝り方だ。…けど

「…謝る所も、そこじゃねえだろ」

呟かずには、いられなかった。

鏡士郎が淹れたお茶を啜りながら、漸く落ち着きを取り戻したシルヴィアは再び優雅に振る舞う。

鏡士郎も鏡士郎で、何事もなかったかのようにシルヴィアの後ろに控えている。

唯一、俺だけが居心地の悪さを感じていた。

ま、そりや当然だろ。

机の上にドカッと、銀の鞘に納まったナイフを、思い切り差し出されていたら、な。

「…これは何だよ？」

「そんなこと聞くまでも無いだろう？見たままの、ナイフだ。正式に言えば、このナイフはトレンチナイフ、と言ってな。第一次世界対戦時に、狭い塹壕の中での白兵戦用に作られた近接武器で」
「そういうことを聞いてるんじゃない。なんでこれを持って来て、俺の目の前の机の上に置き、いかにも『取ってください』と言わんばかりにしていることの理由を尋ねているんだよ」

「…ああ、そのことか。それならもつと単純な話、君にそれを受け取ってもらいたいからそこに置いたまでのことだ。…まあ、護身用、とでも思ってたほしい」

「護身用……？」

もう一度、机の上のナイフの方を見つめ直す。

刃渡りは18cmほど。ナイフにしては大振りだ…と思われる。

鞘の周りには革のベルトが巻き付けられており、恐らく携帯や秘匿も可能にしているのだろう。

黒色の柄にはナックルガードとグリップが備えられており、とても握りやすい。実用性重視であることは、まず間違いない。

刃を抜くと、刃のすみからすみまで、目映く輝く銀一色に彩られており、無駄な装飾が一切無い、シンプルな作りをしているのが分かる。

極めつけは、純粹な銀刃が仄かに帯びた、紫色の輝きだ。普通の銀ならば、有り得ない発光現象だが……。

「その剣は、我がドラケリア家に伝わるもの。吸血鬼の苦手とする『紫外線』を纏うよう、我等が持つ魔術と鍛冶能力の全てをもって打たれた、吸血鬼殺しのための剣、『串刺し公^{ツェベッシュ}』だ」

「『串刺し公』……これ、お前の家の家宝、なんだろ？そんなに大切なもの…俺なんかに預けてもいいのか？」

だが、シルヴィアは躊躇うことなく、あっさりと返事を返してきた。

「構わないよ。私も鏡士郎も、その剣を戦闘で使うことはないし…何より、まだ吸血鬼同士の戦いに不慣れな君には、少しでもアドバンテージがあつた方がいいだろうしね」

「……そうか……なら、有り難く受け取っておく」

「そうしてくれると助かる。君には、まだ死んでもらいたくないしね」

俺の返事に満足した笑みを浮かべたシルヴィアは、飲み干した紅茶のカップを鏡士郎に預け立ち上がり、部屋の外へと出るため、扉の方へと歩みだす。

「さて、そろそろ…我々吸血鬼にとつての『昼寝』の時間のようだ。…今日は色々なことがあつたから、少し疲れてしまった。私はそろそろ、床に着くことにするよ」

時刻は3時をすでに回っている。ここに来てから、もう三時間も経つたと考えるべきなのか…あれだけのことがありながら、まだ三時間しか経っていないと考えるべきなのか…短いようで、とても長い時間だった。

そう俺に思わせる核となつた少女は、扉を少しだけ開き、再びこちらを見据えて来る。

…威厳と風格を兼ね備えた、厳しくもどこか優しい眼差し…。

その強い意志を秘めた美しき紅の眼に、俺は自然と引き寄せられていく。

いったいどれだけの時が流れただろうか

見つめ合う一瞬が、何分にも何時間にも…いや、永遠に等しいとすら感じられた。

それほどまでに、俺は彼女の眼に引き寄せられているみたいだった。

「　　また会おう、遼」

「ああ。…またな」

交わす言葉は、それ以上必要なかった。

何も言わずとも、見つめ合う瞳から、自ずと意志は伝え合うことは出来た。

『死なないでくれ』という小さな願いと、『絶対死なない』という小さな決意。

それを交わしただけで、十分だった。

「…さて、もうそろそろ俺も帰るとしようかな」

風呂から出た後から今まで借りていた服を返し、高速乾燥機で乾かされた私服に着替え、最初にこの場所に入ってきたとき通った扉をくぐろうと相変わらず不気味で装飾華美な巨大扉を押し開けようとする。

「お待ちください、神谷君」

扉の取っ手を握り、思い切り押し開けようとした瞬間に、背後から声がかかる。

振り向かずともすぐに判断できる。菊岡 鏡士郎だ。

「…まだ俺に何か用があるのか？」

振り向かないままに、質問を投げ掛ける。

忘れ物の用事でも、シルヴィアからの伝言でもないだろう。ほと

んど手ぶらの状態でここに来たわけだし、シルヴィアは既にベッドの中で寝ているはず……なのだが……。

「……貴方に一つだけ、忠告をしておきたいのです」

「……忠告？」

「はい。……単刀直入に言わせてもらいます。神谷君、貴方には

」

慇懃無礼な態度な中にも、微かな威圧感。さっきまでの柔らかな雰囲気など微塵も感じさせない。

……だが、俺が驚愕したのは、そこだけではない。……彼は、従者としてあるまじき発言を

「この事件に、これ以上関わらないで頂きたいのです」

今、俺の目の前でしたのだった。

5章・警告と襲撃

「この件に関わるな、だと？…何を馬鹿なこと言ってるんだよ、アンタは。…そもそもこの件に関わることになったのは、アンタの所の主人が頼んできたからじゃねえか。なんで主人の考えに背くような真似してんだよ」

この空間からの出口である扉に背を向け、目の前に控える漆黒のスーツを纏った青年執事・菊岡 鏡士郎を睨みつける。

一方の鏡士郎は、俺の視線をまるで気にすることなく、毅然と構えている。

眼鏡の奥の瞳の蒼は揺らぐことなく、ただ一点 俺の瞳を見据えている。

何を思い、何のために俺にこの件から手を引くように促しているのかは分からない。…だが、その意志の強さだけは、ひしひしと伝わって来る。

一瞬の静寂の後、依然として俺を睨みつけたまま、俺の問いに答えるように言葉を発し始める。

「…私は単に、貴方の身を案じているのですよ」

「…どういう意味だよ。…既に俺はこの件の関係者、逃れられない状況まで来てるんだよ。もう何度も殺されかけてるからどれだけ危険なのかは重々承知して」

「あの程度で私達の生きる『世界』の全てを知ったと思っているなら、大間違いですよ」

俺の言葉を遮り、大きさの増した声で威圧的に、鏡士郎が反駁する。

忠告……いや、これは『警告』……もしくは『命令』の域に達している、そう考えてもおかしくはない、強く低い声色だ。

敵意……は、無いようだが、どうしても体が勝手に身構えてしまう。

冷や汗が額を流れる。平静を保っていたつもりだったのだが、内心は動揺していたみたいだ。

この雰囲気は……そうだ。シルヴィアの言い知れぬあの威圧感。アレに似ているのだ。

「お嬢様も、全てのことを貴方に話されたわけではありません。故に、貴方はまだ私たちの全てを把握したとは言えませんでしょう？」

「それは……」

正論過ぎて、全く反論出来ない。

……確かに、鏡士郎の言っていることは正しい。

シルヴィアから聞いたことだけでは、まだ何か足りていないような、核心に至れていないのは、俺も端から気付いていることだ。

……だが俺は、それを承知の上でこの件に首を突っ込むことを決めたのだ。それでも他人に口出しされるのは、あまり気分の良いことじゃない。

俺の反駁を許すことなく、間髪入れずに鏡士郎は言葉を紡ぐ。

「……それに、貴方がこれまで生き残れてきたのは、お嬢様が貴方を直接護衛なされていたからなのですよ」

「……!!」

その事実については初耳だった。

この一週間、確かに何かあってもおかしくは無い気がしていたのだが、結局何事もなく時は過ぎていった。

しかしそれが、シルヴィアのおかげによる平穏だったとは思ってもよらなかった。

……だからあいつは、俺の顔を初めて見たような反応を見せなかったのか……

それと同時に、もう一つだけ引つ掛かることがあった。

「……じゃあもしかして、事件の日以降、俺を見ているようなあの薄気味悪い視線は……」

「…間違いない、殺したはずの貴方が生きていることに気付き、自身の不始末の隠滅を図ろうとしている『切り裂きジャック』本人…
…もしくはその手下、信奉者、関係者の何れか^{いす}…でしょうね。仕掛けて来なかったのは、お嬢様の護衛に気付いていたから…と思われるます」

「…やつぱりか……」

推測したことに関して納得すると同時に、的を射ていた鏡士郎の発言に少しばかり驚かされる。

俺もついさっきの話からようやく察することができた事実を、まるで最初から知っていたかのように述べていく。

実を言えば、俺が妙な視線は、記憶の無いあの夜から一週間ずつと感じ続いていた。

特定の時間帯 毎晩日が落ちきってから、朝日が顔を出すまで

特定の場所 ある程度、周りを見渡せる広い道で。

特定の間 感じ ジトジトと俺を観察するような、ネットリと絡み付くような、奇妙な、そして不気味な感覚が。

…それがもし、再び俺を殺そうとする者の眼差しだと言うのならば、全ての辻褄が合うのだ。

が、それはあくまで推測の話。根拠の無い不確定事実だ。

「…どうしてそこまでハッキリと言いきれる？…確かに俺もその可能性にはたどり着きはしたけど、断定できる事実では無いだろうに」

「…言っただけでしょう？貴方はまだ、吸血鬼の『世界』の全てを知っているわけではない、と」

「質問の答えになってねえぞ」

「なっていますよ。吸血鬼の『世界』では、そういったことは日常茶飯事ですから。これぐらいのことはあつて当たり前です」

「…そんなもんかよ」

「ええ。そんなものですよ」

その威圧を揺らがさずまに、笑顔を浮かべてニッコリ笑う。
余裕があれば『怖いから止める』とツツコミたい気分だが、今は

そんな気分ではない。

「…だとしても、俺はこの件から下りる気はない」

「…何故です？」

先程までの笑顔から一変、再び怪訝そうな表情に変わる鏡士郎。

この話を俺に聞かせて、少しでも俺の考えを変えようとしてもしていたのだろうか。…だが、残念だったな。

「…俺は一度決めたことは、意地でもやり通す主義なんだよ。あんなの話しいたぐらいで、はいそうですねと簡単に同意できるほど素直でもねえしな」

「…そうですか。残念です」

「残念そうには見えないけど？」

「そういう顔の作りをしているものですから」

鏡士郎は、意外とあっさり引いてしまった。

もつと力押ししてくると踏んでいたのだが、別にそういうわけでも無かった。残念そうな顔をしてはいるが、ただそれだけ。

その内に秘められた真意は、表情からはまったく読み取れないが。

「…ですが、この件に関われば、もう私達も貴方の身の安全を保証することは出来ません。…それでも」

「危険は、覚悟の上だ」

「…そうですか。ならこれ以上、私が貴方の考えを否定するのは野暮というものですな」

向こうも納得した…というより、俺の意地とやり合っても勝ち目が無いと悟ったのか、漸く威圧するのを止める。

それを見て安心して、俺も肩の力を抜く。

…緊張していたらしいな、体中がガチガチに固まっていたらしい。

くるりと回って背中を向けた鏡士郎は、背中越しに最後の用件を話す。「私達も出来るかぎり貴方に危害が及ばないように心掛けます。なので、あまり無茶はしないようにして下さい」

「…分かつてるよ、それぐらい」

「分かつていただけたなら幸いです。…お気を付けてお帰り下さい。近頃の夜中は物騒ですからね」

「…今も昔も変わんねえよ。それじゃあな」

憎まれ口を軽く叩いてから、扉に掛けていた手に力を込める。

ギィ…と、来たときと何も変わらない不気味な音を放ち、扉は見た目に反した軽さで開け放たれる。

両開きになっているらしいその扉をくぐり抜け、扉の向こう側にいる人影を探すために振り向いてみたが、そこには既に誰もいなかった。

「……見送りぐらいしろっての」

そこはいない人物に再び悪態をついてから、閉じられた扉を背にして、俺は帰路についた。

まだ日は昇っておらず、街灯も消えた裏路地は、少し先が何も見えないぐらいに真っ暗闇だった。

辺りには全くと言って良いほど人影が無く、物音一つ鳴らない。

聞こえるとすれば、俺の呼吸、足音、服が擦れる音…それぐらいだ。

なのに、感じる。俺を見る、あの視線だけは

それだけが俺に教えてくれる。この空間にいるのは俺だけではない、別の誰かが俺をつけている、ということ。

…誰なんだ…どこから見てるんだ…？

周りを見渡しても誰もいない。気配を感じることもない。…だが、

『目』の存在だけは、ひしと伝わって来る。

少しずつ追い詰められている様な気分になる。汗が流れてくる。

落ち着け……こいつは今までも俺のことをただ『見ていた』だけじゃないか。こいつは俺を襲う気なんて無い。だから焦る必要なんて無い。

…そうやって心を落ち着かせようとしても、不安は一向に拭われない、焦りは増すばかり。

ダメだ。悪い方にばかり考えてしまう。

…そんな中、不意に脳裏に先程の鏡士郎の言葉が過ぎる。

『殺したはずの貴方が生きていることに気付き、自身の不始末の隠滅を図ろうとしている』
『もう私達も貴方の身の安全を保証することは出来ません』

その言葉を意識した瞬間、今まで感じなかった、もう一つの強く、大きく、禍々しい意志を感じた。

…そう、これは『殺意』。

『怒り』とも『憎しみ』とも違う、最も根源的な、人間の本能の一つ。だが、抑圧された奥底に秘められた感情。

明確で鋭い、ただただ俺を殺さんとする意志の塊が、俺に向けられている。

俺は震えた。ただ恐怖に揺り動かされて。ただ本能のまま感じ取って。

そして予感した。これから俺の身に降り注ぐであろうことを。その果てにある結果を。

『死』。

一時間ほど前にシルヴィア刺された時…あの時は、何が起こったかを理解する前に刺されたため、『恐怖』より先に『痛み』の感触が全身を襲った。だから、死を恐れることなくしていられた。

だが、今は違う。明確に向けられる『殺意』が俺の中の感情を刺激し『恐怖』が生まれている。『痛み』を伴う前から。

人と言うのは、事前に自分の身に降り注ぐ事実を伝えられていれば、ある程度それに対する意識が向いて、自然と気構えが出来ると思っていた。

…だが流石に、『自分が死ぬ』と言う事実に対する気構えだけは、しようと思っても出来ない。…当然だ。気構えだけで何とか出来るものではないからな、『死』だけは。

そしてそれはもちろん、ついこの間までただの人間だった俺にとっても例外ではない。

つき動かされるかのように、全力でこの場から立ち去ろうとした、その瞬間

「オンヤア〜？ 餓鬼はもう寝る時間だぜえ〜。なあに夜中に一人でほっつき歩いてんだあ〜？」

突如、背後に人の気配を感じる。

一瞬、声を出してしまいそうになったが、寸前の所で留まった。

…というのも、二つ、気付いたことがあったのだ。

まず一つ目、声の主が現れた行き止まりだったはずの俺の背後正確には、先程俺が出てきたシルヴィアの仮住まいがあるだけで、人が通れるような道は無かったはずだ。

つまり、この男はたまたまここを通ったと言うわけではなく、この廃ビル郡の中のどこかに隠れ、ここを通るはずの、あるいは通った人間を待伏せていたと言うことになる。

そして…もう一つ、奴から感じる…これは、『殺気』。

さっきから感じているものと規模は違いこそすれ、根源的なもの

は何も変わらない。

ただ人を殺そうとするだけ、憎しみも怒りも無い、純粋な『殺意』

気付けば俺は、全力で走っていた。

後ろを振り向けば殺される。立ち止まれば殺される。逃げなければ殺される

恐怖が、俺を駆り立てていた。

「オイオイ逃げんたってえゝ！楽しめねえじゃんかよゝゝ！！」

そういった下卑た男の声は、規則的に鳴り響く足音と共に、次第に遠ざかっている。

楽しんでいいのか、あるいは追う気がないのか……。どちらにせよ、今逃げなければ、俺は確実にあいつに殺されるだろう。

来るときにはそんなに長く感じなかった狭い路地が、終点の無い果てしなく続く道のように思えた。

「……その君、こんな時間に何をしてるんだい？」

荒い呼吸と足音しか聞こえなかった耳に、前方からの新たな声が聞こえる。先程とは打って変わった、冷徹さを感じさせない優しいげのある声。

確認できた人影は、全身を青い服に包んでいた30代半ばの男性、警察官だった。

考えてみれば、今は深夜の3時。家出少女や不良少年など、夜の街を出歩く子供達を補導するために警官が徘徊していても、なんらおかしくは無かった。

「……たっ……助けッ」

助けを求めようと、声を張り上げた。

だが、その声は届かなかった。

ビシュッ…と、辺り一帯に紅色が広がる。

見覚えのある紅　そう、血の紅だ。

ハッとなって腹部に手を当てる。だが、傷は見当たらない。この血は俺のものでは無かった。

では誰の血だ？あの男に刺されるとすれば、一番近くの俺であるはずだ。

襲撃者が一人なら、の話だが。

気付いた時には、もう遅かった。

襲撃されたのは、俺の目の前の警官。その男には既に

首が、無かった。

「…ジョン、少し落ち着きなよ。その子を殺すチャンスは、これから幾らでもあるんだから」

声が、出なかった。

血を吹出しながら路地に転がる生首を見て。首を失い、崩れ落ちるように膝を付き倒れる首から下の体を見て。

そして、隙間から差し込む月光を背後に現れた、返り血に塗れた青年を見て…

「…あ…ああ……」

叫べなかった。

恐怖に押し潰されそうになって、ただ立ち尽くすしか無かった。

「…うつせえな、テッドオードラケリアの嬢ちゃんがいねえ今しかチャンスはねえだろーがよお！」

眼前の青年が声を発して一呼吸置いた後、俺の背後から再びあの声が上がった。悪寒が再び込み上げて来る。

「…何時でも君は軽率だね、ジョン。…それに、どうしてそこまで男殺しを楽しめるんだい？ボクには理解不能だよ…」

「ケツ、強姦魔もどきが…オレのこと悪く言える質^{たち}かよお!!」
二人が何を言っているのか、全く耳に入っていない。…いや、入
れたいとも思わない。

『死』、『死』、『死』……。こいつらの話から、雰囲気から、
何もかもから感じ取れるのは、『死』のただ一文字だけ……。

俺の中を満たしていたものは、それに怯え、生じた『恐怖』……。
こいつらが発する『死』の臭いに怯え、ただただ震えるのみだった。

死にたくない

「つーわけだあ、餓鬼んちよ。…テメエにはここで死んでもら
うぜえ…」

何も知らないまま…こんなところで

「男を殺すのはボクの美学に反するけど、まあ、あの御方の命令だ
から仕方ないね…」

まだ…終わる…わけには

「泣き叫ぶくらいはしてくれよお、餓鬼んちよお!!!」

「ッ!!!」

辺りに満ちるの静寂。冷たい夜の冷気が、俺の肌を撫でる。
閉じられた俺の瞳は何も映さず、光芒一つ通さなかった。

ここは、天国か?それとも地獄か?

いや、どちらでも無い。空気の冷たさを感じるし、何よりまだ周

りの殺意が痛いほどに感じられる。

…だが、痛みも何も無い。

刺されたはずの痛みも無ければ、血の流れる感覚も無い。

…生きてるのか…俺は…？

「キラ・クラウン『殺人道化』、ジョン・ゲイシーに、高名シリアルキラ、

テッド・バンディ…貴様等が最初に仕掛けて来るとは…。どうやら、

『おまえらのリーダー切り裂きジャック』には余裕がないみたいだな」

うつすらと目を開けた途端に、俺の視界全体は光に包まれた。

…いや、光ではない。美しく棚引く純白の髪、それに月光が反射して、これまでに見たことがないほどに幻想的な風景を生み出している。

それとは対照的に、その身を包む漆黒のゴシックドレスは闇に溶け込み、その隙間から僅かに除く純白の肌を夜の闇と共に一層際立たせている。

少女が握る二本の細剣　マンガーシュは、夜に溶け込む黒、夜に際立つ白、二つの対照的な色を以って輝かしく存在している。

その剣の切っ先にて交わるのは、また別の…銀に輝く二つの切っ先。

ソレが握られる手の先にいるのは…二人の男性。

「…ッ!？」

「なっ…なんででめえがここにいやがるんだよお!!？」

方や返り血を体中に浴びた、もの優しげそうな風貌ながらも、十分過ぎる狂気を内に秘めた青年、テッド・バンディ。

方や歪んだ顔付きで、ピエロの様な滑稽な衣装に身を包む男、ジョン・ゲイシー。

見なりも歳も、何もかもが違う二人であったが、ただ一つだけ共通するものがあつた。

それは、『驚愕』の表情。

突然の闖入者に、俺の殺害を邪魔されたということもあるのだろ

うが、それだけじゃない。

こいつらが驚いているのは、もっと別のこと

「…遅れてすまない、遼。…君を、助けに来た」

そう、吸血鬼のお嬢様、シルヴィア＝ヴラート＝ドラケリア
の登場、それに驚愕しているのだ。

6章・月光と決意

「シル……ヴィア……。…お前……。どうして……。ここに……。？」

満月の光を背に浴びたシルヴィアは、二本のマンガローシュを左右の手に握り、腕を交差させるように俺の前に立っている。

チリ…と微かな音を立てながら、その刃は火花を散らしている。

俺を狙う二つの銀の刃と、俺を庇う黒と白の剣。

シルヴィアは涼しい顔でその刃を受け止めているが、その剣の操り手は両者とも男。…しかも吸血鬼ヴァンパイアの、だ。

「理由なんて聞くものじゃないぞ？…よく言うではないか、『人を助けるのに、理由なんて必要ない』…とな」

尚も平静を保ったまま、背後で震えて立っている俺に話し掛けてくる。

…どちらかと言えば、襲撃者の二人組の方が余裕の無いように見える。

片方の男は、ジョン・ゲイシー。

本名はジョン・ウェイン・ゲイシー。40年代のアメリカ合衆国生まれの連続殺人鬼。四十年の短い生涯の中で、三十三人の少年を殺害した有名な猟奇殺人犯だ。

子供を楽しませるためにピエロの恰好をしていたことから、『ライクラウン殺人人道化』の異名を持っていたと言われる。『サイコキラー殺^キ

もう片方の男は、テッド・バンディ。

本名、セオドア・ロバート・バンディ。ジョン・ゲイシーと同年代、同じ国に生まれ、彼と同様に大量の殺人を行った殺人犯。

三百人以上もの女性を惨殺し、更に自らの性欲を満たすための道具にしたとされる、アメリカ史上最悪の凶悪殺人鬼。『シリアルキラー連続殺人鬼』の原初とされた男でもある。

どちらも十何年前に処刑、あるいは病死したとされていたはずだが……こうしてこの場に現れたということは、身代わりを使ったか、吸血鬼の力で乗り越えたか、そのどちらかだろう。

『切り裂きジャック』がまだ健在で、しかもこの日本でまた殺人を犯している……という事実を聞かされた時ほど驚きはしないが、警察にとつてはいい迷惑だな、と思える。

……だが、問題はそんなことじゃない。

その凶悪犯罪者二名の顔をしかめさせる……それほどまでにシルヴィアが強いのか、ということだ。

幾らシルヴィアが『王の一族』であるにしろ、人殺しに慣れた二人がたつた一人の吸血鬼相手に怯むとは到底思えない。

その間に、圧倒的な実力差でも無いかぎり、だろうがな。

「……分が、悪いみたいだね……。一旦退こう、ジョン」

「はあ！？ふつぎけんなよあ！ここまで来て、諦めてたま」

「彼女の二つ名 忘れたわけじゃ、無いよね？」

「ブラッディ……ローズ……」

「そ。彼女の二つ名は『吸血鬼として』のものだ。君みたいに『人間^トとして』のものじゃない。……当然、この差も分かつてるよね？」

「……ちっ……」

あくまで冷静に状況を分析したテッド「バンディに対しジョン」ゲイシーは、明らかに不満げな様子を現している。

二人でかかれれば傷一つくらいは付けられるはずだろうに、それでもテッドには攻める様子が見られない。

……かといって、絶望的になっっているわけでも無いのは、恐らくシルヴィアが深追いはしないということを理解しているからだだろう。

俺という、足手まといを抱えているせいで……

「……しゃーねえ、ここは退いといてやらあ。命拾いしたなあ、餓

鬼んちよ」

触れ合ったままであった刃を押し返し、大きく後ろに飛んだ後、シルヴィア…そして俺に向かって、皮肉を込めた笑い声を発するピエロ男。

同時に、その反対側にいた美丈夫も、シルヴィアがバランスを崩した瞬間を見計らって大きく後ろに飛ぶ。

力の入れ所を失ったためか、シルヴィアも一度体勢を崩したが、すぐさま何もなかったかのようにマンガーシュを構え直す。

左右の刃を裏手に持ち、腕を下ろし気味に構える独特の構え。形こそ整っては見えないが、一部の隙も見当たらない。

「…どうした？男が二人もいるというのに、たった一人の女に怖じけついてしまったのか？」

依然として余裕を持った顔付きをしたまま、少し笑みを含んだ表情で挑発をかける。

「…ま、そういうことですよ。ボクらの様なただの『感染者』^{バンデミア}程度じゃ、『王の一族』の貴女の実力には遠く及びませんから」

それなのに、この優位を生かそうとしないでこの場で俺を仕留めようとせず、それなのに、この優位を生かそうとしないでこの場で俺を仕留めようとせず、みすみすチャンスを逃すような真似をするのは何故だ？

…それに、この時点で標的を仕留めそこなったなら、それこそ次の襲撃への対策を練られてしまい、行動が起こしにくくなるはずだ。すぐに殺す必要がないのか…それとも、何時でも俺を殺せるのだと余裕でいるのか……。

どちらであつたとしても、今を生き残りたい俺にとっては好都合ではある。

「…そろそろ夜も明ける頃だ…。ボクらはこれで失礼します。またお会いしましょう、『^{ブラッディローズ}血塗れの薔薇』、シルヴィア嬢」

テッドⅡバンディは、丁寧に深いお辞儀をするや否や、後方に大

きく跳躍し、大通りの向かい側の路地の影に消えていった。

これで、残ったのはあと一人。少し気分が落ち着いて、緊張が解けようとした時

「これで終わったと思うなよお……」

獣が唸る様に、もう一人の襲撃者・ジョン・ゲイシーが憎しみを込めた声を出してくる。

シルヴィアが既に俺とジョンの間に立ち塞がっているため考え無しに襲い掛かって来ることはないだろうが、滲み出る殺気だけは意識の外に追いやることが出来ない。

滑稽な身なりをしていながらも、肌に化粧をただけでは隠しきれないほどに歪みきった表情からは、逸れ相応の歪んだ笑み　殺しへの『執着』が見て取れる。

「その嬢ちゃんのおかげで今回は命拾いできたみてえだがなあ……オレ達はその簡単には諦めたりはしねえ。リーダー直々の命令でもあるしなあ」

ジリジリと後ろに後ずさりながらも、威勢の良さだけはまるで衰えていないようだ。

暗闇に溶け込み、見えるか見えないかのギリギリの位置で立ち止まり、再び醜い笑みを浮かべる。

「……テメエは逃げられりやしねえ。……ま、次会った時は覚悟しとけやあ。腰抜かして何も出来ねえやつ殺すのはつまんねえから、少しはまともに戦えるようになってけやあ」

最後にそれだけ言い残すと、ピエロは下卑た笑い声を上げながら跳躍、ビルの壁を蹴って飛び屋上にたどり着くと、視界の外へと再び跳躍し飛び、暗闇へと姿を消した。

「 退いたか…」

周囲に人の気配が感じられなくなってから、ようやくシルヴィアも警戒を緩め、構えを解き武器を下ろす。

両手のマンガローシュをくるくると手の中で回し、その勢いを殺さぬまま、袖の中にある鞘の中へと刃を滑らせる。

その際、彼女の白い絹の様な長髪が風にたなびき、月光を反射して幻想的な光景を作り出す。その光の中一筋映し出される紅い眼光もまた…この少女が、俺とは違う世界の住民であるという事実を教えてくれる。

「間一髪……だったな。間に合って良かったよ」

俺が怪我してないかどうかを軽く確かめた後、心底ほっとした様な表情を浮かべる。

確かに服にはまだ渴いていない血がこびり付いてはいるが、これは俺の出血ではないから、当然俺は怪我などしていない。

…だが、怪我をするよりも血を流すよりも、ずっと心苦しい生傷を、一つだけ…付けられてしまった。

一つは、恐怖に足がすくんで、何も出来なかったこと。

喧嘩ぐらいなら、高校生の時に腐るほどやった。だからいざ吸血鬼と戦うことになっても、俺なら戦える、俺なら勝てる………って思っていた。…けどそれは、俺がまだこの世界のことをナメきっていたから、俺の傲慢さが生んだただの勘違いだったんだ。

…それなのに、ジョン・ゲイシー…あの殺人鬼に睨まれ、殺気をちらつかせられただけで、恐怖に頭が支配された。頭が真っ白になった。

俺は…無力だった…

悔しい。目の前の人間すら守れなかったことも、たった一人の少女に守られたことも、何も出来なかったことも……。

悔しい。悔しい。強くなりたい。強くなりたい。

自分を守るくらいに、誰かを死なせないくらいに、あいつらを倒せるくらいに

「もう止める…遼。これ以上やれば…君の手が……」

意識が現実に戻ってきた時、シルヴィアが俺の右手を胸に抱え込んで、何かを止めるように訴えかけていた。

気付けば、さっきまで何ともなかった俺の右手が、滲み出た血によって真っ赤になっていた。

手に刺さっていた小さな石片、ヒビの入った俺の右側の壁から察するに、俺は知らず知らずのうちに拳を壁にたたき付けていたみたいだった。

小さい頃の癖が、まだ治ってないみたいだな

「…悪い。…もう…大丈夫だ…」

「あっ……」

抱え込まれていた手を振りほどき、シルヴィアに背を向け手を握りしめる。

感情が行動に現れてしまうのは、俺の昔からの悪い癖だ。

昔はこの癖のせいで、俺は感情が高ぶる度に、無意識に人を傷付けていた。中には、骨をへし折ったり、殺しかけた奴もいた。

間違いなくそのせいだろう…俺に近づく人間はほとんどいなかった。

学校でも常に恐れられ、嫉まれ、嫌われ…だがイジメの対象にしようとする人間もいなかった。

先生にも見放された。友達がいけないのは全てお前が悪いのだ、と突き放すように事実を言われた。

だから、いつも俺は孤独だった。

そんな俺が友達を作るためにできたのは、テレビの番組の話でも、

好きな音楽や漫画の話でもない。『力』で押さえ付けて『屈服』させることだけだった。

そんなことで作れたのは『友達』なんかじゃない。『奴隷』、『部下』、『舎弟』……どれも『友達』 対等な立場の関係には程遠い、力だけで作り上げられた紛い物の関係に過ぎない。そんなことは分かっていた。

だけどその時の俺は、それを嬉しく思っていた。快感に思っていた。例え紛い物だったとしても、それが俺にとっては『人間関係』であることには違いなかったのだから。

俺はひたすら力を求めた。強くなるため努力をした。 全ては、紛い物の『関わり』を作るために。

そんな俺から、『力』を取ったら、一体何が残る？

……いや、何も残りはしない。俺には結局、『力』しか無かった。

今の……戦えない俺は……文字通り『無力』だ……。

「君が今考えていることの全ては、私には分からないし、検討もつかない。……だが、今の君が何かに悩んでいることぐらいは分かる……」

背中になにかがトン、と触れる。

小さくも大きく感じる、冷たくも暖かく感じる……シルヴィアの頭。背を向けた俺に体重を預けるように……また、体重以外にも何かを預けるように……ゆっくり、ゆっくりと力を入れてくる。

丸めこんだ手の柔らかい感触も、時折かかる息のくすぐったさも、何もかもが敏感に、そしてはつきりと感じられる。

「……お前に……俺の何が分かるんだよ……」

「『全ては分からない』、と言っただろう？……私に分かるのは、君が何かに対して、非常に悔しい思いをしている……ということだけだよ。……まあ、君の表情を見れば……私でなくとも、大体の予想はつくだろうがな……」

「……」

「…戦えなかったのが悔しいのか？」

「ッ！！？」

急に心のうちを見透かされた様な感覚に陥り、寒気が走る。

コイツは何でも見透かしそうな気がしていたが、本当に今考えていることを言い当てられるとは思わなかった。

後ろを振り向くと、シルヴィアは一瞬キョトンとした表情をしていたが、俺の驚いた顔を見たあと軽くにやけてくる。

「凶星……だつたみたいだな？ほとんど勘で言ってみたのだが…」

「…勘…かよ…」

急に肩の力が抜ける。と同時に、何だか恥ずかしくなってきた。

驚きすぎた反動もあるのだが、なによりシルヴィアに鎌をかけられ、からかわれたことが恥ずかしくて堪らない。

「…ふむ……では、こうしよう」

ポリポリと恥ずかしげに頬を掻く俺を横目にシルヴィアは、俺のポケットから手帳とペンをサツと抜き取り、破り取ったメモ欄の上に何か書き留めていく。

「…何してんだ？」

シルヴィアがペンを滑らせる先に描かれていたのは、地図 聞

き覚えのある建物の名前や配置から、渋谷の辺りのものだと思われる

と住所、そして、何かの暗号と思われる言葉 『宵（よい）

と一暁。交わり、闇照らす紅の牙有る。』という文字列。

「…これに書いてある場所に、明日の夜9時に向かうといい。そこに、君にとって今最も会すべき人間がいる。私からも話を付けておく」

「おつ、おい！ちょっと待て！いきなり何の話を」

「当然、君に関係のある話だ。そこに書いてある合言葉を言え

ば、『沢代』と言う者に会えるよう手配しておこう。…健闘を祈る」
メモを俺に渡し、別れも無しに帰ろうとするシルヴィアを引き止

めようとするが、質問に即座に答えられた挙げ句、いとも容易くあしらわれてしまう。

路地の奥　つまり自分の住居がある方へと歩むシルヴィアは、闇に紛れる寸前に立ち止まり、こちらを振り向かないままに、俺に向かつて最後の励ましを送ってくる。

「　その警官の死も、何もできなかったことも、決して君のせいなどではない。…もし自分を責めていると言うのなら、今すぐそんなことは止める。自分を責めたって、何も始まらないのだからな」

「……」

「まだ、何も始まってなどいない。…君は今、漸く我ら夜の眷属^{けんそく}吸血鬼の一人となったのだ。君が無力であったという事実は、この世界においてはただの『序奏曲^{プロローグ}』に過ぎない。無力だと思っなら、強くなれ。無知だと思っなら、求めろ。…君の奏でる『交響^{シンフォ}曲^{ニデ}』は、これから君自身の手によって、無限に描くことができるのだからな」

それだけ言い残すと、再びシルヴィアは歩きはじめ、路地の奥の暗闇へ姿を消した。

「…フツ………」

自然と笑みがこぼれてくる。さっきまであつた無力感は、既に消え去っていた。

なんだ。簡単なことだったんじゃないか。

『力が無いなら、手に入れればいい。足りないなら、補えばいい』
…そんな初歩的なことを見失うなんてな。

『死』の恐怖が俺の目の前に立ち塞がるなら、乗り越えればいい。
昔の俺が、『孤独』を乗り越えようと、一人で足掻き、もがいた時のように

気持ちに整理が付いた俺は、これ以上一人で立ち止まっても何も意味は無いと悟り、路地裏をあとにすることにする。

途中、首無し死体となった男が目に入ったが、無理矢理に目を逸らし、前に進むことに気持ちを向ける。

あんたの死は無駄にしないで、名も知らない警察官さん。

そう心の中で念じ、その横を通り抜けて人気の無い道に足を踏み入れようとした。

その時。

「動くな。余計な行動をとれば撃つ」

「ッ！！？」 背中に突き付けられる冷たい感触。引き起こされる撃鉄の音。

間違いなく、突き付けられているこれは…拳銃。

路地の脇に隠れ、恐らくは俺が背を向けた瞬間を狙っていたのだろう。明確な目的を持って。

「……なんで……」

先程の機械的で冷酷な声とは打って変わって、今にも噁り泣きそうな悲しげな声が聞こえてくる。

この声には……聞き覚えがある。

だが、その勘だけは外れていてほしかった。

「……なんで……アンタなのよ……遼……」

「……やっぱり、お前……なのか……？」

背中越しに聞こえる悲愴感のある声の持ち主の方向へ振り返り……

そして

現実を、思い知らされる

「……ユリア……」

7章・幼なじみと警部

憎しみと悲しみ……二つが混じり合った感情が、背中越しにひしと伝わる。

全ての感情は、俺の背中に銃を突き付ける少女・浅野^{あさの} ユリアから放たれている。

ユリアは俺の幼なじみであり、唯一俺に話し掛けてくれた人間だ。

性格は快活で天真爛漫、他人のことをよく考え行動ができる、クラスの人気者だった。

ただ、多少お節介だったため、周りから距離を置かれていた俺に対して過度に接することも少なくなかった。

それが原因で、俺を標的にした事件に巻き込まれ、その度に巻き添えを食っていた。

だが、それでもユリアは、俺の隣に居続けようとした。

何時でも、笑顔のまま

「……これは……遼がやったの……？」

震える声を搾り出すように、ユリアの声は俺に一つの質問を投げ掛けた。

恐らくユリアが指しているのは、そこに転がされている警官の死体……のことだろう。

この場にいる人間は俺だけ。そして、この男の返り血を浴びている人間もまた然り。刃物も所持していることもあるから、疑われるのはまず間違いないだろう。

だが、コイツは分かっているはずだ。昔の俺を……そして、俺がこんなことをするような人間では無いということを……。

「……ねえ……答えてよ……遼……嘘だって言つてよ……」

銃口が震えている。恐怖に震えているのか、あるいは目の前の情景が信じられないのか……。

……が、それも当然だろう。ユリアは人一倍優しかったが故に生き物が死ぬところを直視できないほどであり、また人一倍他人思いであつたが故に、人を疑うということが出来ない人間立つたのだから。

だが、俺はその声に答えることは出来なかつた。

恐らく今までの俺 何も知らず、平穩というぬるま湯に浸かつていた頃の俺であれば、これをやつたのは自分でも無いと必死に弁明し、見苦しく喚いたかもしれない。……あくまで、これは俺が『一般人』だつた時の話だ。

だが、今は違う。全てを知ってしまった今では、そんな弁明は全くの無意味だということぐらい理解できている。

ヴァンパイア

……こいつにどうやって吸血鬼のことを説明してやればいい？並大抵の人間は、こんな現実味の無い話をされても、信じられるわけが無い。むしろ、無意味な言い逃れか、頭が狂っているか、もしくは麻薬でも使つた後遺症かと思わないだろう。

それはもちろん、まだこの件に関わっていないユリアについても同様であるため、幼なじみであるからと言って気軽に話せるわけでもない。

そしてもう一つ……なにより、俺がコイツを巻き込みたくないと思つているからだ。

こいつが今握っているのは恐らく、銃口の感触、突き付け方から予測すると、携帯式の小型リボルバー拳銃だろう。私服警官が携帯するのに便利のように、銃身を短くして作られたものだ。

拳銃を所有・保持できる存在と言えば、暴力団やヤクザの類か、

警察官かのどちらかだ。

前者の可能性はほとんど無いだろう。リボルバー拳銃は、その構成故詰められる弾の数が少なく、正直なところ、あまり実践的とは言えない。組同士の抗争が勃発することも少なくはないあちらの世界では不利になることも少なくないため、出回っているものの多くはオートマチック拳銃のはずだ。…それに何より、こいつは暴力が嫌いだ。自分から進んで暴力を奮う道には進もうとは思わないだろう。

となると、残るは後者…つまりは警官、ということになるが、実はこれには根拠がある。

こいつは正義感も強いことがあって、『警察官になる』という漠然とした目標を持っていたこともあるのだ。

俺は前々から「お前は体が弱いんだから、無理してまで他人を守る必要はない」と言っていたのだが、それでもユリアが諦めきれなさそうな顔をしていたのは記憶に新しい。

…だがあくまで、こいつの体が弱かったのは小学校までの話であり、俺が中学卒業後転校する頃には、元気に校庭を走り回ったりする様子が見られたのも事実ではある。

俺と会わない間に体を鍛え、警察官として活動できるまでに体力を付けたとしたなら、考えられないこともないのだが……それにしても、体が弱くても関係ない、鑑識や事務の仕事に回らなかったのは不思議である。

だとしても、この事件はこいつには荷が重すぎる。

いくらこいつが強くなっていたって、相手は吸血鬼、しかも『王^{アルカード}の一族』の追跡から百年以上も逃げ続けている、文字通り化け物みたいなやつだ。

体力を付け、護身術や逮捕術をどれだけ学んだのかは知らないが、今のこいつに敵うような相手ではないことは歴然としている。

そんな危険なところに一般人を放り投げるような真似は、いくら俺にでも出来ない。……それが幼なじみなら、尚更だ。

「……答えられないの、遼……？……一体どうして……」
声が徐々に小さくなっていく。

…相変わらず、普段は気丈で明るく振る舞っているくせに、俺がだんまりを決め込むと必ず普段の勢いが無くなる悪い癖、まだ治ってないみたいだな。

人を疑うことを知らない純粋な性格も含めて、それがあるから前は警察には向いてないって昔から言ってるのに……仕方ない奴だな、本当に。

「……今はまだ話せない。…退いてくれ、ユリア」

「……どうして？どうして話してくれないの！？あたしは……遼が……」

突き付けられている銃口へ入る力が、ほんの少しだけ緩む。

この状況を打破するには、この瞬間しかないッ！…と考え、行動を起こそうとした。

のだが…。

「ぐっ！？」

背後の銃を奪おうとしたが、俺の手は虚しく空を掴んだ。

代わりに俺の腕が捕まれ、その関節部分に、無理矢理捻曲げられるような痛みが走る。

右腕が身体の反対側に回されて、力が全く入らず、まるで身動きが取れなくなる。

…これは……昔警官にお見舞いされたことがある。確か……逮捕術の固め技の一つ。詳しい名前は知らないが、相手の腕を逆方向に捻曲げ押さえ付けることで相手を拘束する術だ。

技は初歩の初歩で習うようなものだが……ユリアに俺を完全に押さえ付けられるほどの力があるとは。

「……あたしだって、あれから強くなっただよ……遼……」
耳元で吐息に乗せて囁き声が聞こえる。

流石に体格の差が影響しているのか、押さえるのに必死で声を搾り出すこともままならないようだ。

「……遼……あたしに隠し事はしないで……。……あたしは、ただ遼のことを……」

腕にかかる力の量が増す。あまりの激痛に口を聞くことすらままならない。

……隠し事など、したくはない。

正直で純粹で、まるでダメな人間だった俺を、孤独から唯一救おうとしてくれたユリアに、嘘などつきたくない。全てを洗いざらいぶちまけてしまいたい。

事実を述べてしまえば、間違いなくこいつはこの事件に嫌でも関わるだろう。無差別に様々な人間を殺す『切り裂きジャック』^{ジャック・ザ・リッパー}を、正義感の強いユリアは許さない、それは昔から変わらないからな。

……だが、そんなことをしてしまえば、こいつも関係者と見なされて、最悪、命を狙われ、殺されるハメになるかもしれない。

自分のことに精一杯な今の俺に、こいつを守りきれとは思わない。シルヴィアに匿ってもらおうということもできるだろうが……。ユリアのことだ、恐らくこいつは前線に出てきて、俺に付き纏うだろう。それでは守ってもらう意味がない。

……ユリア。お前は今まで通り、平穏な世界で、平和に生きるべきだ。

お前みたいに性格のいい女の子はそうそういないからな。ルックス……は、今の顔をまだ確認してないから分らないが、誰の目から見ても相当の美人となっているだろう。……忘れてたけど、俺の幼少頃の初恋は、お前だった、それぐらいに昔のお前は可愛らしかったぞ。

……お前はきつと幸せに成れる。それは俺が保証する。

だから……そんな汚れ仕事は、お前がする必要は無いんだ。

これは……俺のような薄汚れた人間がすべきことなんだ。関わったら、お前まで黒ずんでしまう。

だから

「……悪い、ユリア」

ガッ

「うつ……!？」

固め技を掛けられておらず、まだ動く左腕で、思い切りユリアの腹に肘打ちを当てて。

前までの俺なら、利き手と逆の左手で肘打ちを当てても、一人気絶させるほどの威力はなかったはずなのだが、流石は吸血鬼の力といった所か、軽い力で安々と卒倒させるまでの威力が出るなんてな。

うめき声を一瞬上げたかと思うと即座に気を失い、俺の体にもたれ掛かって来るように力無く崩れ落ちた。

左腕、そして自由になった右腕で、倒れそうになったユリアの体を受け止める。

そこで、ずっと背後にいたユリアの顔を、ようやく見ることができたのだが……。

淡い栗色の柔らかそうなセミロングヘア、後ろで小さく束ねられたポニーテール。背丈は女性にしては割と高めで、俺の肩先より少し高いぐらい。ハイヒールを履いている様子は無いので、3年とちよつとで相当背が伸びたということになる。

色は健康的な肌色で、小顔ですっきりした顔付きをしており、薔薇のような美しさを持ったシルヴィアとは違う、例えるなら、健気に可愛らしく咲くコスモス……といった所か。

体つきは、病弱だった頃の名残か、所々節が少し細くはあるが、（昔から憧れていたらしい）女性らしい体つきに成っていた。

…地味にシルヴィアより……でかいな……。

「……って、俺は何を考えてるんだよ……相手はユリア、幼なじみだぞ……」

…と、少しやましいことを考えてしまった自分を諫め、そっとユリアをお姫様抱っこする。

色々と触りすぎているのは少し後ろめたいが、この場合は仕方がない。諦めるしかないだろう。

「スウー……スウー……」

安らかな寝息をたてて眠るユリアを見ると、そんなやましい感情も自然と消え去っていく。

…やっぱり、こいつはこんな事件に関わる必要なんてないんだ。

昔から俺に金魚のフンの如く付き纏い、その都度絡んできた不良から守ったり、動けなくなったユリアを背負^{しょ}って帰ったり……あの頃はよくユリアが『今お尻触ったでしょ！』とか言って無実の俺の背中をポカポカ叩いてきたような記憶がある。

…こうやっておぶってみると、こいつの重さは、何一つ変わらないことが身に染みて感じ取れる。

軽いはずなのに、とても…とても重い

「……今は、ゆっくり寝てろよな」

ユリアを起こさないように、ゆっくりと歩きだし、人影一つない宵闇に沈む街を歩きはじめた。

「……ん……こっ……は……?」

ユリアが目を覚まして初めて見たものは、白く発光する蛍光灯の光。自分が寝ていた場所を触った感触も、舗装された道路などではなく、少し破れて綿が出ている古ぼけたソファの革の感触。

……そこは、最後に見た暗がりの中の路地ではなく、明かりの付いた交番、その事務室だった。

「目が覚めたか、浅野」

寝ぼけ眼で辺りを見回していると、窓際から、ユリアの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……河上警部？^{かわかみ}いらしたのですか？」

「ああ。お前からの定時連絡が無かったから、様子を見に来たのだ」

「……お手数をおかけして、申し訳ありません……」

「いい。上司として、部下のことを心配するのは当たり前だ」

「……はい」

現在警部補の階級に位置するユリアの上司、河上 治彦^{ちろひこ}警部は、黒のオールバックヘアに左手で軽く手櫛を入れながら、窓際で缶コーヒーを啜っていた。

「……飲め。体を冷やすのは良くないぞ」

「えっ……？うわっととッ！！？」

ようやく目が覚めたユリアがソファに座り直すと、窓際から離れた警部が、ユリアがいるのとは反対側のソファに腰掛け、煙草の吸い殻が散ったガラステーブルに缶をコト、と音をたてて置き、向かい合うユリアの顔を真剣な眼差しで見つめてきた。

その真剣さによって空気が研ぎ澄まされ、ユリアの頭も体も引き締まる

「……浅野、お前が三時間ほど前、現場検証のために渋谷の裏通りへ向かったことは、もちろん覚えてるな？」

「あ……はい。私も、そう記憶しています」

「お前は、その場で何事かに巻き込まれたのか？」

「……え？」

唐突な質問に、ユリアは一瞬キョトンとする。

「実のところ、自分は現場までお前を探しに行った訳ではなく、この署の前で倒れていたお前を見つけてな。目が覚めるまで見ていただけだから、実際にお前が何に巻き込まれたのかまでは分かった」

「……は、はあ……」

警部がこの様な突拍子もない質問をユリアに投げかけてきたのは、今回が初めてではない。

そして警部のこういった疑問や質問は、大抵事件の核心に触れたものであり、その解決とともに事件が進展するということも少なくはなかった。これは経験故のものなのか……それとも天性の才能なのか……。

それ故に、ユリアは彼の疑問に答えることを最優先に援助して来たのだが。

「……えつ……と……」

今回はかりは、それを話すわけにはいかない理由があった。

「どうした？口ごもる様な質問ではないだろう？」

「……その……えつと……」 ……言えない。

本当は話すべき事がたくさんあるということも。

……この件にもしかしたら、幼なじみの遼が関わっているかも知れないということも……。

全て話せば、遼が犯人だと認めてしまうことになる。

それだけはダメだ。そうなれば、ユリア自身も遼を追い、捕らえるべき立場になってしまう。

まだ、遼を信じていたい。だから、それだけはできない。

「……あたしは……何も……見ていません……」

俯いたまま、とぎれとぎれの声を搾り出すように答える。

焦げ茶のスラックスをひしと握り締めて、ギョツと目をつぶる。

確かに、遼のことを話すつもりは毛頭ない。幼なじみで……

かつての初恋の少年の面影を残す彼を、突き放すような真似はユリアにはできない。

だが同時に、自らの憧れの人であり、大切な上司である人を裏切るようなことも、ユリアはしたくは無かった。

『オルタナティブ 二者択一』。どちらかを切り捨てなければいけない状況は、ユリアには酷すぎた。

「…そうか。話したくないことなら、いい」 意外な返答に、目をパツチリと開け思わず警部の方を見てしまう。

いつもなら、真相解明のために頑なな性質を顕わにするはずなのに、今回はあまりにもあつさりと引き下がったために、ユリアは少し驚いた。

警部がしつこく追求しようとしないうちに…何かあったのだろうか？

ユリアの頭の中は、その疑問でいっぱいになってしまっていた。そんな疑問を抱える中、警部はユリアに、更に思考させるような言葉を吐いた。

「……浅野、お前はこの件の捜査から下りろ」

「…えっ？」

一瞬、その言葉の意味の理解ができなかった。

「下りろ」…とは、もちろん事件捜査の担当 この場合、『切り裂き魔事件』の担当を指すのは一目瞭然だ から外れる…ということを指す。それくらいは、正直頭の出来があまりよくないユリアにでも理解はできた。

理解できなかったのは、警部の発した言葉 その意図だった。

普通、一端の殺人事件程度のこと、担当の人間が捜査から下りるなどということは起こり得ない。有るにしろ、数百人もの犠牲者を出している連続殺人犯や、国家を標的に、無差別に様々な人間を殺し得る可能性を持ったテロリスト、そういった人物を追う時…しかも、そういった例の中でも、滅多に「捜査から下りる」なんて選択をするほどの容疑者は現れない。つまりは、かなり稀有なケー

スと言える。

しかし『切り裂き魔事件』は、ほんの数週間前に一人目の犠牲者が出たばかりで、まだ犠牲者の数も二桁には達していない。確かに、『連続殺人』のカテゴリには当てはまるかもしれないが、『捜査から下りる』ほどの事件とは思えない。

それらの疑問をまるで読み取ったかのように、警部は眉一つ動かさず口を開く。

「……この件の調査は、お前のような新米にはあまりにも重すぎる。……悪いことは言わない。手を引け、浅野」

数々の事件を解決へと導き、犯人逮捕へと貢献したベテラン警部、その豊富な経験故に言えることなのかもしれない。

もしかしたら警部は、この件の真相に既に勘付いており、その危険性を今ユリアに伝えようとしているのだろうか？

だとしたら、これは警部からの警告、もしくは警部なりにユリアに気を使っているのかのどちらかだろう。そう思ふべき……だった。……だが、ユリアはそうは思わなかった。

遼も警部も、あたしに何か隠し事してる

今までも、そしてこれから信じ続けているつもりなのに、二人は自分に何も話さないつもりだ。

自分はただ、二人の手助けができればそれでいい……ただそう思っているだけなのに……。

二人は何も話してくれない。

自分は蚊帳かやの外、何も知らないまま、平穏な毎日を楽しむだけの存在。

それだけは嫌だ。

遼は、『良い子』としてしか周りに見られていなかった自分を、

初めて『浅野 ユリア』として認め、一人の『ただの』人間として唯一接してくれた。

警部は、東京を初めて訪れ当ても無かった自分に、自分がここにいってもいいという『理由』を与えてくれた。

二人が自分にくれたものは、今の『浅野 ユリア』が存在する理由であり、根拠でもある。

二人がこの件に関わるなど言っている以上、自分は本当は関わるべきではないのかもしれない。

だが、ただの傍観者でいるのだけは、ユリアには到底許せることではなかった。

遼が巻き込まれたこの事件の真相を知るため、警部の思いを知るため、……そして何より、『自分自身』がため…。

「あたしは、絶対にこの件からは下りませんッ!!」

「……………」

無人の警察署の中は、完全に静まり返っていた。

部下の浅野 ユリアがこの警察署から出て行って約一時間後……

河上 治彦は、今だ無人であるその交番の事務室に佇んでいた。

現時刻は6時30分。そろそろ日の光も昇り始め、起床の早い人間ならばそろそろ目を覚ます頃時間帯である。もちろん、この無人の交番にも勤務交代時間が訪れ、この時間帯担当の巡査と普段通りに番を交代するはずだ。

普段通り、ならばの話であるが

「……」

河上の目の前にあるのは、事務室から更に奥に続く扉　倉庫として使われている部屋、その鋼色の扉だ。

それを開けたその先には、二人の警官がいた。恐らく、今が勤務時間の警官だろう。

だが、少し様子がおかしい。

かたや倉庫の壁にもたれ掛かったまま座り込み、かたや端に置いてある机に突っ伏した形でいる。

それだけならばただ酔って寝ているだけなのかと思うが、決してそれだけではなかった。積まれたダンボールの山には、まるでペンを塗りたくったかの様に、鮮明な赤色　血が飛び散っていた。警官の肌の色は血色が失われ白く成っており、まるで血が全て抜かれていたかの様になっていた。

そして極めつけは　警官の左胸に空いた、大きな穴。

周りの鮮血はそこを中心にして飛び散っているようで、血の渴き具合から察するに、まだ死後三時間ほどしか経っていない。

普通なら、この殺され方の酷さだけに着目しているのかも知れないが、河上は別の視点からこれを観察していた。

内臓をえぐり取り殺害する残虐非道な殺害方法。

犯行は深夜に行われていること。

この二つの事実から結び付くもの……それは、ただ一つだけ存在していた。

「……『切り裂き魔』……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374x/>

斬殺者(ザッパー)

2011年11月20日03時16分発行